

Doc. 2750 Evid.

Folder 3

(102)

筆者履歴ノ履歴書ノ

私ノ姓名ハ KLAAS A. DE WERD / クラース・アー・デ・ヴェールト

ト言ヒ、王國和蘭印度軍豫備砲兵少佐デアアル。

私ハ一九〇四年ノ明治三十七年ノ四月六日、和

蘭國 LIMBURG / リンブルク州、ROERMOND / レールモンドニ生レタ。國籍

ハ和蘭國人デアアル。

TRIDENT / ライデン大學（和蘭）ニ於テ法律學ヲ修メタ後

一九二九年ノ昭和四年ノ八月二十八日、SOURABAYA /

（ジャワ）ノ一辯護士事務所ニ入り、一九三七年

ノ昭和十二年ノ半バ迄、RAST-JAVA / 東ジャワ、VALE /

バリ及ビボルネオ東南ノ諸裁判所ニ於テ辯護士ノ實務ニ携ハツ

タ。

一九三八年ノ昭和十三年ノ休暇ヲ得テ和蘭ニ暫

クヲ過シタ後、在 BATAVIA / バタビヤ、蘭領印度政廳、司法

省、勞務局（勞務法制課）ニ一年近ク勤務シタ。

一九三九年ノ昭和十四年ノ初頭ヨリ、MEIDAN /

SUMATRA / マトラノ一辯護士事務所ノ共同經營者トナツタ。

一九四一年ノ昭和十六年ノ十二月十二日、王國

和蘭印度軍豫備將校トシテ應召、此ノ身分ノ下ニ

WEST JAVA / 西ジャワノ第一師團參謀部ニ勤務シタ。

王國和蘭印度軍ノ降伏後、私ハ日本軍ノ俘虜ト

ナリ以後一九四五年ノ昭和二十年ノ九月中旬ニ至

Doc 2750

I.

Doc 2750

WEST JAVA
WEST JAVA
ル迄、西ジャワニ於テ數ヶ所ノ收容所ニ監禁セラレタ。此ノ間、最初ヨリ私ハ、馬來語ノジャワ新聞ノ收容所内翻譯者トシテ働イタ。日本軍ノ收容所當局者ハ、一九四四年ノ昭和十九年ノ一月末迄ハ、收容所ニ馬來語新聞紙ヲ持チ込ムコトヲ許可シテキタ。

本諸島嶼ニ於ケル事情ハ特ニ私ノ興味ヲ惹クモノガヤツタノデ、私ハ長時間ヲ割イテ之ガ記事ヲ廣範圍ニ翻譯シ、又數名ノ友人ト共ニ、此等ノ資料ノ人名別及び問題別ノ目錄ヲ作成シタ。

我々ノ意圖シタ處ハ、行政、宣傳、民事、中央政廳、勞働、政策等々ノ如キ題目ヲ取上げ、日本軍ノ占領ニ關スル若干ノ研究資料ヲト、ノヘルト共ニ、又日本當局者ニ關スル個人的資料ヲ蒐集スルコトニアツタ。此ノ仕事ヲ日本軍ノ看視兵ヨリ秘匿スルコトガ愈々困難ニナツタ時ニハ、私ハ之等研究資料ノ若干ノモノニツイテ既ニ記錄ヲ作りアゲテキタ。一九四四年ノ昭和十九年ノ一月、近ク我々ガ別ノ收容所ニ移サレルコトガ明カニナツタノデ、我々ハ之等編纂記錄及び目錄ヲ儘ニハンダ附ニシテ收容所構内ノ地下所々ニ埋メタ。

一九四四年ノ昭和十九年ノ二月以降一九四五年ノ昭和二十年ノ九月迄、時折密カニ持チ込マレタ

II.

馬來語或ハ（翻譯セラレタ）日本語ノ新聞紙ヲ讀
ンダリ、又馬來ノ日本ノ地方放送ヲ密カニ聴取シ
タリシテ、蘭領東印度ニ於ケル情勢進展ノ實情ニ
常ニ遊レヌ様ニシテキダ。此ノ間、私ハ絶エズ新
來者ヤ其ノ他ノアラユル利用シ得ル經路ヲ通ジテ
情報ヤ觀察ノ交換ヲ行ツタ。

一九四五年ノ昭和二十年ノ八月十五日以降ハ、
私ハ再ビ定期的ニ馬來語新聞紙ヲ入手スルヤウニ
ナツタ。又同年九月初旬私ハ自分ノ編纂記録及ビ
目錄ヲ一揃ヒ全部、其ノ隱匿場所カラ取出シタ。
同月中頃、私ハ收容所カラ解放サレ、日本軍ノ占
領ニ關スル資料蒐集ト云フ私ノ仕事ヲ急成スルタ
メ、N. I. U. A. (蘭領印度民政府)司令長
官ノ政務部一之ハ後ニ聯合軍軍政府民事部ジャワ
支部ト稱セラレタニ配屬サレタ。此ノ目的ノ爲
ニ、私ノ指揮下ニ、二十名ノ職員ヲ擁スル特別ノ
一課ガ創設サレタ。此ノ課ハ一九四六年ノ昭和二
十一年ノ一月、和蘭軍情報部 (本部在 ^{VALENTIA} バタビヤ)
ノ一特別部門トナツタ。
既述ノ N. B. P. I. S. /ノ和蘭軍情報部
ノ對日事務課、S. B. A. T. I. O. (東南
アジア總諒通譯部隊) 其ノ他諸官署ノ緊密ナ協力
ノ下ニ、私ハ日本軍ノ占領ニ關スル利用可能ノ資

料ヲ蒐集シタ。之等資料ハ種々ノモノカラ得ラレ
 タガ、就中、略々完全ニ集メタ新聞紙、在^{TAVAN}ジャワ
 第十六軍ノ官報タル「オサム カンボウ」ノ全篇
 占領期間中ニ刊行サレタ他ノ諸島嶼ニ於ケル官報
 ノカナリ完全ナ全集、更ニ、日本人、和蘭人、イ
 ンドネシア人及ビ其ノ他軍民當路者及ビ私人ノ報
 告並ビニ調査、押收シタ日本及ビ馬來ノ公式及ビ
 非公式文書類、日本及ビインドネシアノ當路者ニ
 對スル訊問記録等ノ中ニ収録セラレシモノデア
 ル
 一九四六年ノ昭和二十一年ノ五月、私ハ蘭領東
 印度檢事總長ノ事務所ニ參加シ、日本ノ第一級戰
 争犯罪容疑者ヲ東京國際軍事裁判所ニ起訴スル準
 備ニ必要ナ文書類ヲ蒐集スル特殊任務ニ服シ、此
 ノ資格ノ下ニ日本軍ノ東印度占領ニ關スル資料ノ
 蒐集ト云フ私ノ仕事ヲ續ケタ。

一九四六年ノ昭和二十一年ノ九月中頃、私ハ蘭
 領東印度檢事總長ノ一代表者トシテ東京へ到着、
 同地ニ於テ、更ニ資料ノ探索ヲ續ケタ。

斯ク蒐集シタ情報ニヨリ私ハ此處ニ添附ノ「日
 本軍ノ蘭領印度占領」ト題セル報告ヲ作成シタノ
 デアル。

Doc 2750

文書第貳七五〇號

辯護士、R・N・I・A / 和蘭王國蘭印軍 / 少佐

/ K. A. DE WERD /

K・A・デ・ヴェールト 既準備陳述書

題

日本軍 / 蘭領印度占領

國際檢察部 和 蘭 課

一九四六年 / 昭和二十一年 / 十一月

日本軍ノ爾領印度占領

緒言

日本軍ノ爾領東印度占領ハ便宜上時間的順序ニ依リ次ノ五期ニ分ツコトトシタ。即チ

I. 一九四二年ノ昭和十七年ノ三月ヨリ八月ニ至ル期間、即チ過渡期ト稱シ得ル期間。

II. 第二期、即チ日本側ニヨル統治ノ基礎強化ヲ特徴トスル自一九四二年ノ昭和十七年ノ八月至一九四三年ノ昭和十八年ノ七月ノ期間。

III. 一九四三年ノ昭和十八年ノ七月ヨリ一九四四年ノ昭和十九年ノ九月ニ至ル期間。即チ數多クノ約束ニ依リ住民ヲ味方ニツケントスル企圖ニ基キ統治ガ行ハレタル期間。

IV. 一九四四年ノ昭和十九年ノ九月ヨリ一九四五年ノ昭和二十年ノ八月初メ迄ノ期間。コノ期間ニ於テハ將來ヲ約束スル政策ガ更ニ進展セラレタ。

V. 一九四五年ノ昭和二十年ノ八月初メヨリ一九四五年ノ昭和二十年ノ九月末ニ至ル期間。即チ最後ノ關頭ニ於テ、南方ニ日本ト友好關係ヲ持スル一國家ヲ創設セントスル企テガ試ミラレタ期間。

右ニ述ベタ各期ノ區分ハ多少勝手ニ決メテアル。從ツテ之等ノ限界ハ大体ノ目安ト見ナケレバナラヌ。時ニハ理解ヲ易カラシメルタメ、或ル期間ノ事件ガ他ノ期間ニ迄マダガツテキテモ、其ノ問題全般ヲ悉皆其ノ期間ノモノトシテ取扱ツタ。日本ノ南方地區關係ノ政策ハ總テノ他地區ニ於ケルト同様遍不ク東京ニ於テ決定サレタノデアアルカラ、唯僅カニ其ノ地方々々ニ依ツテ些細ナ變更ガ加ヘラレタニ過ギズ、ソレモ實地適用上ニ於テノ變更ガ行ハレタモノテ、其ノ原則自体ニ就テデハナイ。

從ツテジャバ/CHINA/ニ於テ起ツタ事ヲ根本トシテ論ジ、南領印度ノ他ノ地域ニ於テハゴジャバーニ於ケル場合ニ比シ重要ナル差異ノアル變ツタ點ノミニ就テ記述スルニ止メル。

第一、過渡期

一九四二年／昭和十七年／初頭ヨリ
同年八月頃迄

東印度諸島到ル所ニ於テ其ノ目的ノタメニ急造サレ
タ獄舎ヤ收容所ニ官界及ビ商工業界等ノ西歐系有力
者ガ即時且組織的ニ悉ク抑留サレタ。

當時未ダ日本人ニ依ツテ代替スルコトノ出來ナカ
ツタ西歐人ノ場合ニハ一時的ニ除外例ガ設ケラレタ
彼等ニ代ヘル日本人ガ到着スルヤ否ヤ、是等ノ人々
モ亦抑留サレタ。殘ル少數ノ勤勞者達ノ一群モ別ノ
幾ツカノ收容所ニ抑留サレテ外界トノ接觸ガ出來ル
ダケ制限サレタ。

尙多數ノ著名ナ中國人達ガ主トシテ過去ニ於テ蔣介
石政權ヲ支持シタトノ理由及ビ反日的態度ヲ持スル
ト言フ嫌疑ノタメ抑留サレタ。

抑留方針ハ時ガ經ツニツレ更ニ嚴重トナリ、加之、
一九四二年／昭和十七年／七月以降斯カル措置ハ漸
次西歐人婦女子達ニモ及ブ様ニナツタ。

一九四三年／昭和十八年／末迄ニ此ノ情勢ハ稍ヤ
平靜ニ歸ツタ。斯クテ年齢六十五歳或ヒハ七十歳ヲ
越ユル男女ノ少數ノ例外ヲ除キ、蘭印諸島生レニア
ラザル西歐人ハ男女共總テ抑留サレテシマツタト言
ヒ得ルノデアアル。其ノ上蘭印生レノ西歐人デ今猶西
歐世界トノ緊密ナ關係ヲ明カニ示ス者ハ悉ク抑留サ

レ又西歐ニ對スル同情ヲ持ツモノト「疑ヒ」ヲカケ
 ラレタモノハ亞細亞人デモ幾ツカノ收容所ニ拘禁サ
 レタノデアツタ。一九四五年ノ昭和二十年ノ九月一
 日現在ノ日本ノ公式報告書ニ據ルト六二、五三二名
 (即チ男子二〇、六七六名、女子二八、一六九名、
 小人約一三、六八七名)ガ「ジャヴァ」(JAVA)ニ
 抑留サレテ居タ。此ノ外ニ西歐人軍關係者ハ總テ俘
 虜トサレタノデアツタ。コレハ其ノ數四萬五千名ニ
 及ビ内六一〇七名ヲ除キ、彼等ハ奴隸勞動ノタメ、
 「ジャヴァ」(JAVA)カラ何處ヘカ徵用サレテイツ
 タノデアアル。

従前ノ西歐人社會ニ就テ言ヘバ次ノ三ツノ「グルー
 プ」ノミガ依然「自由」デアツタ。即チ樞軸國國籍
 者達ノ一群(彼等ハ祖國ノ敗亡後迄抑留ヲ免レテイタ)
 少數ノ中立國人及非抑留歐亞混血人ノ一詳デアアル。
 是等「グループ」ニ屬スルモノハ嚴重ナル監視ノ下
 ニ置カレテ居ツタノデアリ且ツ他ノ種々ノ方法ニ依
 リ其ノ「自由」ノ行使ヲ阻止サレタ。

コノ抑留サレナイ西歐人社會ハ非常ニ嚴シイ壓迫ヲ
 加ヘラレタ。

加之彼等ハ日本軍憲兵及其ノ手先ノ徒ニ依ツテ不絶
 監視サレ、幾百ノ犠牲者ヲ出シタ不斷ノ廣範圍ニ亘
 ル逮捕及ビ裁判審理ニ依ツテ威嚇サレタ。ソシテ憲
 兵ニ依ル訊問及ビ日本軍軍法會議ノ處置ノ結果トシ

テ犠牲者達ハ凡ユル權利ヲ剝奪サレ又專斷的ナ虐待
 ト兵糧攻メニ身ヲ委カシタ。
 西歐人ハ出來得ル限り公私ノ別ナク其ノ占メテ居ル
 地位ヲ追ヘレ新ニ就職スルコトガ出來ナクテ、
 コノ社會ノ此ノ部分ニ屬スルモノノ大部ハ生計ノ資
 ヲ得ル途ヲ斷タレテ仕舞ツタ。銀行ノ總テノ預金ガ
 直グ様凍結セラレ、西歐人系ノ諸銀行ハ清算セラレ
 而シテ清算上支拂ヒ得ル部分ハ西歐人達ヨリ取上ゲ
 テシマツタ。少數ノ抑留サレザル西歐人達ハ事實上
 自分等ノ所有品全部ヲ除クニ賣ル以外ニ方法ガ無イ
 トイフ羽目ニ立到ツタ。日本兵ハ氣ノ向ク儘ニ何デ
 モ徵發シ多クノ場合何等代償ヲ支拂ハナカツタノデ
 彼等ハ更ニ苦難ヲ嘗メタノデアツタ。日本軍官憲ハ
 強制登録及登録料金支拂（歐洲人ニ對シテハ一五〇
 ギルダ―、中國人及他ノ非インドネシア亞細亞人ニ
 對シテハ七五ギルダ―）ノ制ヲ採用シタノデ是等
 社會ニ屬スル人々ニ對スル情勢ハ一層惡化シタ。
 是ト共ニ西歐ノ諸國語、間モナク公用及商用ノ通信
 ニ、其ノ使用ガ禁ゼラレ或ル地域デハ家庭内ニ在ッ
 テスラモ西歐語ヲ話スコトガ禁ゼラレタ。家庭デ西
 歐語ヲ使用シタ者ハ憲兵ニ疑ハレ憲兵隊ノ取ル處置
 ヲ受ケタ。
 是ト同時ニ日本軍ハ直チニ總テノ學校ヲ閉鎖シ始メ
 タ。第二ノ期間中西歐系ノ諸學校ト教育トハ明確ニ

禁止サレテイタ。

一九四二年／昭和十七年／四月、東印度諸島以外カラノ無線放送聴取ニ對スル禁令ガ公布サレタ。コノ禁止ハ海外ヨリノ短波放送ノ受信ニ適セザルヤウニスルタメニ凡テノ無線受信機ノ強制封印措置及ビ登録ニ依リ實施サレタ。一九四二年／昭和十七年／七月、日本軍法會議ニ依リ若干ノ宣告ガ下サレ公示サレタ。之ニ依リ右禁令ニモ拘ハラズ海外放送ヲ聴取シ且或ヒハ之ニ依ル「ニュース」ヲ流布シタル若干數ノ人々ハ就中死刑ノ宣告ヲ受ケタノデアツタ。

日本軍ノ全占領期間ヲ通ジ此ノ禁止ヲ遵守スル事ヲ怠リタル疑アル人々ハ憲兵ニ依リ定期的ニ拘引サレ拷問サレ又往々ニシテ裁判サレタノデアツタ。

敵國語ニテ書カレタ或ル指定書籍ヲ多數所有スルコトハ要所罰犯罪行爲ヲ構成スルモノトサレタ。斯カル書籍ハ差出スヲ要シタ而シテ燒棄サレタノデアツタ。

古キ幾多ノ記念碑—過去ニ於ケル西歐勢力ヲ想起セシメルモノ—其或ルモノハ何レヘカ撤去サレ、或ヒハ一部破壊サレ或ヒハ倉庫ニ收藏サレタノデアツタ。大部分ノ地域ニ於テハ街路及ビ都會ノ名稱ハ日本語名或ヒハ時トシテ馬來語名ニ變ヘラレタ。

店舗、商社、商標等ノ名稱ハ最早歐文デハ表現セラレザルニ至ツタ。斯クテ是等ハ日本語又ハ馬來語

7.

Doc 2750

テ書カルルヲ要シタノデアツタ。
憲兵ノ除的ノ措置ハ實ニ西歐人社會ノミナラズ、
其他ノ社會ノ人々ニ對シテモ實行サレタノデ、民主
的或ヒハ親西歐的同情ノ表現ハ一切符封サレタノデ
アツタ。

コレ迄各種團體が行政問題ニ關シソノ意見ヲ自由ニ發表スルコトノ出來タ一切ノ既存諸會議ハ廢止セラレタノデアツタ。

最初ニ解体セララルコトニナツタモノハ一九一八年ノ大正七年ノニ創立セラレタ人民會議ニシテ、コレハ立法及ビ豫算上ノ機能ヲ運營シテ居タモノデアツタ。次ニジャヴァ、CHAVVAニ於テハ地方參事會、市參事會及ビ同様立法並ビニ豫算審議權ヲ持ツテキタ攝政參議會ガ廢止サレタノデアツタ。

ジャヴァ以外ノ地域ニ於テモ亦人民ニ各自其ノ國ノ行政ニ參與スル機會ヲ與ヘルタメ民主的基礎ノ上ニ設立セラレタ各種參事會ガ掃蕩セラレテシマツタ。

一九四二年ノ昭和十七年ノ四月二十九日附日本軍ジャヴァ最高司令官命令第十四號ニ依リ既存セル凡テノ裁判所ハ廢止セラレ、ソノ代リニ日本軍ノ「軍政法院」(グンセイ・ホーイン)ガ設立セラレタ。コノ新司法部ハ臨時ノモノデアリ、後ニ確定的機構ガコレニ代ツタ。

控訴ニ對シ何等規定ガ設ケラレテキナカツタ。一切ノ未了訴件ニ對スル下級裁判所ノ判決ハ控訴法廷ニ依リ確認サレタルモノト看做ス旨聲明サレタ。

一九四二年ノ昭和十七年ノ三月八日並ニ二十日日

シヤワニ眞先ニ上陸シタ諸部隊ニ續イテ前衛隊
 ガ到着シタ。日本ノ第十六軍（治部隊）ノ宣傳班
 （「バリサン宣傳隊」）ニ編入サレテキタコレ等
 ノ日本軍宣傳班員ハ不滿ヲ抱イテキルト知ラレテ
 キタインドネシヤ人ヤ中國人ノ政治家達ト直接接
 觸關係ヲ作ラント試ミタ。コレ等不滿ノ士ノ援助
 ヲ得テ一九四二年ノ昭和十七年ノ四月所謂「タイ
 ガエイ」運動ガ創立サレタ。インドネシヤ人ノ諸
 地方委員會ガコノ運動ノ活動ヲ遂行スルタメ創設
 セラレタ。シカシコノ様ナ委員會ハ地方日本軍宣
 傳班員達ニ依リ企圖セラレタ活動ヲ遂行スル以外
 ニ何等ノ機能ヲ持ツテキナカツタ。コレ等、宣傳
 班員達ハ凡ユル輿論發表手段ノ支配權ヲ直チニ握
 ツテシマツタ。公、私ノラヂオ放送映畫事業並ニ
 全新聞ハ直チニ彼等ノ支配下ニ置カレタ。占領後
 約二ヶ月間、コレ等ノ放送並ニ新聞ハ尙「オラン
 ダ」語デ放送サレ、印刷サレル事ヲ許サレテキタ。
 宣傳隊ガ充分ニ編成セラレルヤ否ヤ凡テノ新聞紙
 ハ禁ゼラレ、コレニ代ツテ日本軍宣傳班ニ依リ慎
 重ニ選バレタ「インドネシヤ」人及ビ中國人ノ指
 導ノ下ニ「マレー」語デ書レタ新シイ新聞ガ紹介
 セラレタ。天長節（一九四二年ノ昭和十七年ノ四
 月二十九日）ニシヤワ」ニ於ケル最初ノ新「マレ

「語」日刊新聞「^{ASIA RAYA}アジャラヤ」(大亞細亞)ガ
設立セラレ、一九四五年/昭和二十年/九月九日
ニ到ル迄日本宣傳ノ最モ重要ナ發表機關トシテ規
則正シク刊行ヲ續ケタ。最初ソレハ日本ノ指導下
ニアツタガ、「インドネシヤ」人ノ幹部ガ充實シ
タコトガ明ニナツテカラハ指導體ハ正式ニ彼等ノ
手ニ渡サレタ。シカシ實際ハ指導權ガ尙日本人ノ
手ニ殘ツテキタ。

「ジャワ」ノ他ノ數ヶ所モ間モ無クコレニ倣ツ
タノデ遂ニ日本軍管理ノ「マレー」語新聞ハ「ジ
ヤワ」^{JAVA}ハ五ヶ所デ發行セラレルニ到ツタ。ソノ外
ニ日本語新聞「^{JAVA SHINBUN}ジャワ新聞」ガ「^{BATAVIA}バタビヤ」デ發
行セラレタ。

日本ハソノ宣傳ニ於テ自國ヲ「解放者」ト呼ビ
日本ハ「新秩序」建設ノタメニ來タノダト述ベタ。
「新ジャワ」ハ日本ノ指導ノ下ニ「大東亞共榮圈」
ノ立派ナ一員トナルタメニ教育サレルノダト述べ
タ。日本軍ハ嚴重ナ檢閲制度ヲ設ケタガ此ノ檢閲
制度ハ、郵便、電信、電話等總ベテノ通信關係ニ
布カレタノミナラズ之ハ寫真商ガ現像ノタメ預カ
ツテ居タ寫真ニ迄及ンダ。

更ニ總ベテノ公式ノ發言モ檢閲ヲ免レ得ナカツ
タ。此ノ檢閲ハ、ラヂオ放送、新聞ノミニ止マラ

ズ、演劇、說教等ニ迄及ンダ。演劇會社等ハ逐次
宣傳事業部ノ手中ニ歸スルニ至ツタ。

書籍ノ刊行ニ於テモ檢閲ヲ免レ得ナカツタ。ソ
シテ占領期間中ハ宣傳事業部ヨリ出ヅル事業ノミ
ガ行ハレタノデアル。

コレラノ方法ニヨリ日本人ハ輿論ノ發表ヲ總テ
統制シタ。

當期ニ於テ南方地區ノ日本化ガ始メラレタ。例
ヘバ官廳諸機關、事務所、等ノ名稱ニ對シ急速ニ
日本語ガ導入サレ此ノ使用ハ占領期間中徐々ニ普
及シテユキ、タメニ、遂ニハ馬來語ノ新聞ハ日本
語デ表示シタ事務所、機關、設立物、團體、理念
等ヲ知ラナイナラバ殆下讀ムコトハ不可能トナル
ニ至ツタ。

日本ノ關係當局者ハ年度ニ關スル日本ノ方法、
日本ノ時間制及日本ノ會計年度制ヲ取入レタ。

警官ハ帽子ノ徽章トシテ日本ノ國旗ノ印ヲ付ケ
タ。回教信者ニトツテ不快ナ天皇崇拜ガ行ハレ、
總ベテ公式ノ集合、會合ハ義務的ノ東京宮城遙拜
ヲ以テ始メラレタ。大抵ノ會合ノ終リニハ「天皇
陛下萬歲」ガ唱ハラレタ。日本ノ總ベテノ祝賀日
ガ導入サレタ。

日本國旗ノ外ハドンドンナ旗モ掲揚ヲ許サレズ、日本

ノ祝賀日ニハ嚴格ナ規則ニヨツテ日本ノ國旗ヲアラユル公私ノ建物ニ掲揚セネバナラナカツタ。和蘭、又ハ聯合國諸政府ノ者ノ肖像ハ禁止セラレ、此等ハ提出サレネバナラズ燒キ捨テラレタ。日本ノ皇室ノ方々ノ肖像其地ノ畫像ノ所持ニ關シテハ、「不敬」ニ亘ル事ヲ嚴ニ戒シメルタメ規定ヲ設ケ取締ツレテキタ。

郵便切手及收入印紙ニハ「大日本」ト記サレ後ニ馬來語ト日本語デ「大日本」ト刷リ込マレタ新シイ郵便切手ト收入印紙ガ發行サレタ。

日本人ハ直チニ日本語ダケヲ教授スル學校ヲ設立シ始メタ。其ノ後インドネシヤ人ニ對スル學校ガ再開サレタ時日本ノ要求ニ應ズルタメ課程ガ修正サレタ。其ノ新計畫中ノ重要課目ハ日本語、日本ノ唱歌、日本ノ舞踊等デアツタ。

財政經濟分野ニ於テハ或地域ハ陸軍、或地域ハ海軍ノ管轄デアツタ事實ニ拘ラズ東印度諸島ニ適用サレタ諸計畫ハ相似タモノデアツタ。「ジャバ」/ JAVA / ト「スマトラ」/ SUMATRA / ハ日本陸軍ノ種々ナル部隊ニ依ツテ占領サレ、又「セレベス」

/ CELEBES / 「ボルネオ」 / BORNEO / 「モルツカ」
 諸島 / THE MOLUCCAS / 「チモール」 / TIMOR / 等
 ハ日本海軍ニ依ツテ占領サレテキタガ
 事實上相互間ニ何等ノ連絡モ存在シナカツタ。ソ
 レニモ拘ハラズ基本原則ハ全ク同一デアツタ。
 一九四二年ノ昭和十七年ノ三月七日附在「ジャ
 ワ」 / JAVA / 日本軍司令長官ノ最初ノ布告第一號
 ハ「日本政府、半ギルダ」ト和蘭語ノ文字ノア
 ル日本軍票ヲ採用シタ。紙幣ハソノ他ノ額面ノモ
 ノモ同様發行サレタ。東印度諸島ノギルダ貨ハ
 圓貨ノ價值ニ引下ゲラレタ。最初ノ中ハ既ニ流通
 中ノ紙幣モ流通ヲ許容サレタ。併シ後ニ到ツテ、
 即チコノ舊通貨ガ市場ニ於テ日本軍ノ占領通貨ヨ
 リモカナリ高イ價值ヲ持ツニ至ツタ時、舊通貨ハ
 回收サレ、ソレヲ所持スレバ罰サレルコトニナツ
 タ。日本ノ紙幣ハ種々ナ占領地域ニヨツテ差異ヲ
 示シテ居ツタ。最初ハ「馬來」 / MALAYA / ト同一
 軍政下ニアツタ「スマトラ」 / SUMATRA / ニ於テ
 ハ、「ジャバ」 / JAVA / ニ於テ發行サレタ紙幣
 ノ場合ト同シ地模様ニ同シ文字ガ記サレテキタガ、
 ソレハ英語デアツタ。然ルニ東印度ノ他ノ地域及
 葡領「チモール」 / TIMOR / デハ和蘭文字ノモノ
 ガ用ヒラレタ。

一九四四年／昭和十九年／ニハ日本文字ト馬來文字ヲ用ヒタ新ナル紙幣ガ圖案サレ「バタヴィア」／BATAVIA／デ印刷サレタ。コノ紙幣ハ何等裏附ナク無制限ニ發行サレ、ソレガ間モナク「インフレーション」ヲ惹起シタ。コノ「インフレーション」ハ一九四三年／昭和十八年／初頭ニ始マリ加速度的ニ膨張ヲ續ケ終ニ一九四五年／昭和二十年／中頃迄ニハコノ紙幣ハ元ノ購買價值ノ僅カニ約四十分ノ一ノ價值シカ持タナクナツテシマツタ。

官立、私設ノ全銀行ハ直チニ閉鎖サレタ。一九四二年／昭和十七年／及ビ一九四三年／昭和十八年／中、ジャワ銀行發券銀行及ビ私立銀行ハ清算サレタ。大部分「インドネシア」人ヲ顧客トスル郵便貯金銀行ト一般庶民信用金庫ハ日本名ノ下ニ而シテ日本側ノ監督ノ下ニ再開サレタガ閉鎖當時ニ於ル金高ハ凍結サレタママデアツタ。後ニ到リ「インドネシア」人顧客ノ現金預金ハ一部凍結ヲ解カレタガ他方西洋人、抑留者及ビ入監者ノ預金ハ凍結サレタ儘日本側ニヨリ設立サレタ「敵國產管理部」(F)ニ移サレタ。コノ(F)ハ敵國人財産ノ「管理」ニ任シタ。コノ機關ハ殆ド全部ノ沒收財産ヲ清算シ、其所有者ガ知レタトキ日本

紙幣ニヨリ清算高ヲソノ所有者ノ貸方ニ計上シタ。
其ノ後一九四五年ノ昭和二十年ノ五月以後コノ
清算ハ急イデ行ハレタ。例ヘバ、パタヴィアノ
FANTIAノデハ屢々憲兵隊員ガ、所謂公開競賣ノ買
手デアツタ。而シテ日本軍占領貨幣ノ代金ハ一般
市場ニ於テノ同シ品物ニ對スル同シ紙幣ノ實際價
格ト何等合理的關係ヲ持ツテキナカツタノデアル。
西洋人輸入業者ノ凡ユル手持商品、並ニ動産ノ
形ニ於ル個人ノ所有物、又西洋人所有ノ支拂請求
權（回收可能トナルトキ）ハ前記敵産管理部ノ手
デ日本紙幣ヲモツテスル請求權ニ振替ヘラレテ終
ツタ。「敵産」ノ所有ハ犯罪ヲ構成シ所有者ハ皆
ソノ引渡ヲ余儀ナクサレタ。留置サレテキナイ歐
亞混血人デスラ敵國人ト考ヘラレ、從ツテ彼等ニ
支拂ハルベキ貸貸料ハ日本側ニ支拂ハレネバナラ
ナカツタ。落札サレナカツタ財産ハ要求ニ依ツテ
日本人官民及彼等ノ被保護者ニ引渡サレタ。

戦前領印度ニ於テハ大資本ハ主トシテ西洋人ノ
 出資ニ依リ元ハ農産企業及ビ詔祖ノ工業ニ投資サ
 レテキタ。農産企業（「ジャヴァ」/「JAVVA」/糖業
 聯合會内ニ組織サレタ製糖工場ヲ除ク）ハ「栽培
 企業管理公團」ノ下ニ日本人ニ依ツテ經營サレタ。
 コノ機構ハ財産管理部下ニアル歐陸農業事業ノ監
 理及ビ「インドネシヤ」又ハ支那ノ資本ニ依リ運
 用サレテ平ルモノモ含メテ他ノ一切ノ農業事業ノ
 統制ノ任ニ當ツタ。所有者ノ利益ニハ少シノ注意
 モ拂ハレナカツタ。コノ團體ノ取ツタ方針ハ嚴重
 ナル戦争目的遂行ノ方嚮ニ指向サレ又、大東亞共
 榮團ノ要求スル生産ノ維持ニ指向サレテキタ。
 直接戦争遂行ニ重要テナイ企業及ビ工業ハ何時テ
 モ可能ナ限リ他ノ生産ニ切換ヘラレタリ、又ハ、
 ソレガ實行シ難イ時ソノ維持ガ、戦後大東亞共榮
 團ニ於イテ必要ト豫想セラレル事ヨリ見テ價値ア
 リト認めラル、場合ハ持續サレタ。茶、護謨、ノ
 農園ハ非常ナ損害ヲ蒙ムツタ。何故カナラバ、日
 本側ハ占領ノ後期ニ於イテ、食料收穫ヲ優先的ニ
 シタ。
 茶ノ木ヤ護謨ノ木ハ刈ラレテ薪トシテ用ヒラレ、
 是等ノ土地ハ食料收穫面積ノ増加ノ爲土着農夫ニ
 分配セラレタ。

西洋人所有ノ農産業ノ大部分ハ清算サレタ。
 全砂糖工業ハ六又ハ七ノ「プロツク」トシテ日本
 ノ大製糖會社ニ割當テラレ、前記團體ノ指導監
 督ノ下ニ是等製糖會社ニ依リ、開發サレタ。
 砂糖生産ハ非信ニ減ラサレ、作業休止ノ砂糖工場
 ニ屬スル機械ハ工場ガアルコイル、ブタノール、
 其他ノ如ク戰爭目的ノ爲ニ一層重要ナル他ノ物資
 ノ製造ニ轉換サレテキナイ時ハ其一部分ガ屑鐵ト
 サレ、撥出サレル運命ニアツタ。

西洋人ニ屬スル不動産ノ所有ハ日本軍ノ創設シタ
 「不動産管理公團」／＼FUDOSANKANRIKODAN／ニ日本
 軍ニ依ツテ譲渡サレタ。

該公團ハ其財産ヲ要求ニ從ヒ業務用並ニ個人用ノ
 目的用ニ供スル爲日本ノ軍、民當局ニ引渡シタ。

不動産所有權ヲ思ヒ切ツテ變更シタ。

所謂個人所有ノ土地ハ一九四二年六月一日付ジャ
 ヴア日本軍最高指揮官布告第十七號ニヨリ所有者
 ニ何等ノ補償ヲ支拂ハズ軍政府ニヨツテ專有セラ
 レタ。

他ノ島嶼ニ於イテモ同様テ、例ヘバ「セレベス」

Doc 2750

／＼OHLIBES／島ニ於イテハ一九四三年／昭和十八年／
三月二十日付民政政府令第十一號ニヨリ、斯クノ如
キ沒收ガ行ハレタ。

公益事業ハ個人ノ所有ノモノモ含ミ軍政府ニヨツ
テ押收サレ、補償金モナシニ運営サレ、然シテ或
場合ノ如キハ、日本ノ個人商社ニ分配サレタ事ガ
アツタ。

私營ノ鐵道市街鐵道及ビ乘合自動車會社ハ國有
鐵道ニ合併サレタ。

私營鐵道會社ノ施設ノ大部分ハ「ビルマ・シヤム」
鐵道ニ積出サレタ。鐵道ノ監督ハ陸軍總局／＼RHKD
YU SOKYOKU／ノ許ニ統一サレ、以前個人會社ニヨ
ツテ獨立ニ行ハレテキタ作業ハ、凡テ痕跡ニ至ル
迄抹殺サレタ。此等ノ會社ノ従業員ハ合同セシメ
ラレ、日本ノ階級名稱ヤ用語ガ採用サレタ。
個人及ビ半官ノ瓦斯及ビ動力會社並ニ個人ノ所有
テアツタ鐵山會社ハ接收サレテ軍政府又ハ日本人
商社ノ何レカニヨツテ操業サレタ。

東印度ノ天然資源開發ノ政策ハ一部ハ軍政府自身
ニヨリ又、一部ハ日本人ノ若干ノ大商社ニ附與サ
レタ獨占權ヲ通シ、又ハ日本ノ「國策會社」ニヨ

ツテ實行サレタ。

專ラ政府ノ所有ト運營ニ係ル銀行テアル南方開發銀行ノT・N・南方開發金庫ノ誤リカノ主要ナル機能ハ南方地域ノ天然資源ノ開發及ビ開拓ニ對スル融資及ビ同地域ノ通貨及ビ金融ノ統制テアツタ。

同銀行ハ大東亞省ニヨツテ監督セラレ、南方地域ニ於イテハ日本軍ニ對スル會計係ノ役ヲ務メタ。日本政府モ又南方地域ノ天然資源ヲ色々ナ日本人出願者ノ間ニ分配シ、各自ニ、此等ノ地域ノ一部ヲ通常獨占權ヲ附與シテ割當テタ。

南方地域ニ於ケル報道事業ノ獨占權ハ、地方代理店ガ最初ニ事業ヲ始メテ平タノニモ拘ハラズ同盟ニ許可サレタ。南方地域ニ於ケル新聞ノ獨占事業ハ日本ノ大新聞各社ノ間ニ分ケラレタ。

銀行界ニ於イテモ橫濱正金銀行及ビ臺灣銀行ガ「ジャヴァ」ニ於テ事業ヲ行フ特權ヲ與ヘラレ總テノ西洋人ノ私營銀行ヲ接收シタ。

此等ノ銀行ノ閉鎖及ビ日本人ノ銀行ノ創業ハ、

21.

Doc 2750

就中銀行ノ債務者ガ無理ヲ乞イラレテ行ハレタ
即チ、債務者ガ西洋人ノ銀行ニ對シ担保トセル資
産ニヨツテ裏付ケラレタル新債權ヲ日本ノ銀行ニ
申シ出テ、其ノ債務ニ對シ、一九四二年ノ昭和十
七年ノ十一月二十五日ニ請求シ付ル旨申シ渡サレ
タ。

自一九四二年 至一九四三年

只今申上ゲタ期間ニ於ケル日本側行政機關ハ比較的簡單ナモノデアツタ。爪哇派遣日本軍司令官附參謀長ハ軍政長官ヲ兼ネテオリ又彼ハ簡單ナ中央機關及東爪哇、西爪哇並中央爪哇各地ニ於ケル行政ノ任ニ當ツテキタ三人ノ陸軍將校ニ依ツテ補佐サレテキタ。行政ハ各占領分遣隊ノ指揮官ニ依リ地方別ニ運営サレタ。

東京ニ於テ立案サレタ原案ハ殖民地行政工業科學及經濟方面ニ於ケル日本人専門家ヨリ成ル團體ヲ直接占領部隊ニ依リテ派遣スルコトヲ考案シテキタ。然シ一九四二年八月上旬マデハ正規ノ行政體が假機關ヲ引繼ガナカツタ。

最初ハ軍ノ一部デアツタ軍政部ハ次イデ獨立機關タルコトニ進展シタ。其ノ機能ノ大要ハ一九四二年三月七日附日本軍司令官布告第一號ニ規定サレタガ右布告ニ於テ同司令官ハ從來總督ガ行使シテキタ一切ノ權限ヲ掌握シテシマツタ。

軍政ハ軍政官指導ノ下ニ九ツノ部ニ分レテキタ。

其ノ各部ハ即チ、總務部、指導並ニ政策樹立機關、
 内務部、財務部、司法部、警務部、交通部、産業部、會計
 監督部並ビニ宣傳部デアツタ。

之ニ加ヘテ各種專項ヲ取扱フ爲其ノ都度、部ノ地
 位ニハ至ラナイガ軍政官ノ下ニ在リ部ト同等ノ獨立
 權ヲ持ツタニ、三ノ局及其ノ他ノ政府機關ガ設置サ
 レタ。即チ宗務部、造幣部、國庫管理部、鑛業聯合會
 等ガ之デアツタ。

時々或ル程度ノ變更ガ行ハレタガ是ハ其ノ機關ニ
 ハ影響ヲ及ボスコトハナカツタ。

戰前ニ於ケル中矢行政機關ハ日本ニ於ツテ徹底的
 ニ而モ全面的ニ改裝サレタ。

總務部トカ宣傳部トカ云フモノハ、何レモ以前ニ
 ハ存在シナカツタ。戰前ノ機關ニ於ケル警察ハ内務
 部ニ屬シテ居リ他面公衆衛生、教育、及ビ勞務ハ（
 現在デハ内務部）ハ別個ノ部若クハ局ニ依ツテ取扱
 ハレテキタ。宗教ハ教育部ニ依ツテ取扱ハレ
 テキタノデアル。

内閣官房、印度國務院、及總督ノ内閣等ハ皆廢ラ消
 シテ了ツタ。新日本部局ト名稱ニ於テ同一ナル以前

ノ一般行政ノ各部局（例ヘバ司法部ノ如キ）ハ日本式ニ再組織サレタ。

日本側部局ニ於ケル重要ナル地位ハ全部日本人ニ依ツテ占メラレテキタ。日本側公報ニ依レバ一九四五年九月一日現在ニ二萬三千二百四十二名ノ日本人ガ爪哇ニ於ケル軍政監部ニ傭ハレテキタノデアアルガ之レハ該地正式駐在常員總數ノ半バニ達スル數デア

ル。司法部ハ東京ニ於ケル帝國政府ニ依ツテ、又ハ南方々面最高指揮官、爪哇派遣軍司令官及軍政長官ニ依ツテ行使サレタ。最初二ツノ機關ニ關スル法令並ニ布告ハ現地ニ於テハ發表サレナカツタガ數千人ノモノガ是等法令並ニ布告ニ依ツテ逮捕サレ、拷問サレ、罰セラレタノデアアル。又最後ニ甲上ゲタ二ツノ機關ニ關スル法令並ニ布告ハ爪哇ニ於テ日本語及馬來語ニ依ツテ印刷サレタ。月三回發行ノ公報、治官報ニ登載サレタ。秘密布告ノ或ルモノハ日本語版ノミニ表ハレタノデアアル。後ニ出來タ參議院ハ、立法權ニ何等影響ヲ及ボス所ハナカツタ。

一九四二年ノ昭和十七年ノ八月五日附、爪哇軍司令官ノ發シタル布告第二七號ハ地方行政ノ完全ナル

新制度ヲ制定シタモノデ、之ニ依リ爪哇ハ地理的ニ以前ノ「區劃」ト同等ナ十七ノ「州」及「バタビヤ」カラナルーツノ「特別市」ニ分レタ。中部爪哇ニ於ケル四ツノ侯地ハ二ツノ侯地事務局ニ依ツテ治メラレタ。

以前ノ西、中央、東爪哇ノ諸「プロヴィンス」ハ併棄サレタ。一九四五年ノ昭和二十一年ノ初期爪哇在留ノ總指揮官ハ、三ヶ所ニ軍政支部ヲ設置シタ。之等ハ總指揮官ガ公式聲明ニ指摘シタ通り、以前ノ「プロヴィンス」ト地理的ニハ同一デアアルガ實質ニ於テハ全ク異ツテキタ。

之等ノ全地方機關ガ以前ノ地方分權的地方自治ニ代リ、嚴格ナ中央集權的組織ノ軍政監部ニ直屬シタ。地方會議ハ、該布告ニハアゲラレテ居ラズ、地方行政ニ人民ガ參與スルコトハ廢止サレタ。州ハ、日本式ニ小單位ニ分割サレタ。之ニハ縣、郡、村、區市及ビ市區ノ如キ日本語ノ名稱ガ與ヘラレタ。

此ノ第二期中ニ、舊制度ニ於テ行政的諸團體ノ機能ヲ定メタ組織的ナ法律ハ廢サレ、日本ノ規定ガ之ニ代リ、中央集權的新行政ハ、之ニ基イタノデアツタ。

州長（以前ノ「レジデント」ニ相當スル）及ビ他

Doc 2750

ノ地方官吏ノ地位ハ、一面ニ於テハ相當ニ強化セラレ、又他面、以前ニ増シテ中央行政ニ從屬セシメラレタ。獨裁主義ガ創メラレタ。之等ノ官吏ハ其ノ上官ニ對シテノミ責任ヲ負ヒ、任務遂行ニ當リ廣範圍ノ自由ヲ得 任免權ヲ 持チ、又其ノ職員ニ對シテ殆ンド無制限ノ懲戒權ヲ有シタノデアリタ。彼等ハ、上官ニヨリ施行サレタ布告ニ補足シテ、規則及ビ夫等ノ條令ニ含まレテキナイ事項ニ關スル規則ヲ發スル權限ガ與ヘラレテキタ。

但、彼等ハ其ノ上官ノ命ニ支配サレ、且凡ユル場合ニ於テ上官ニ對シ責任ガアツタ。

日本人州長及ビ同様ナ當局者ノ聲明ニ依レバ、日本人ノ念頭ニアツタ目的トハ根本的形態ニ於テ臺灣朝鮮ニ於テ行ハレタト同様ナ行政機構ヲ樹立スル事ニアツタ。

現在支配者タル四人ノ「サルタン」ハ持統サレタガ、世襲的ニ其ノ肩書ヲ有スル者トシテデハナク、凡テノ文官ガ爲セルト同様日本軍隊ニ對スル忠誠ヲ誓フ義務ヲ負フ新タニ附與サレタ侯トシテデアツタ。

新制度ノ重要地位ハ、日本人ニ占メラレタ。上ハ軍政監部ヨリ下ハ州廳ニ至ル迄、職員ハ殆ンド日本

26 Doc 2750

但、彼等ハ其ノ上官ノ命ニ支配サレ、且凡ユル場合ニ於テ上官ニ對シ責任ガアツタ。

日本人州長及ビ同様ナ當局者ノ聲明ニ依レバ、日本人ノ念頭ニアツタ目的トハ根本的形態ニ於テ臺灣朝鮮ニ於テ行ハレタト同様ナ行政機構ヲ樹立スル事ニアツタ。

人デアツタ。縣廳以下ハ、「インドネシア」人職員
ガ殆ド全部強サレタ。然シ乍ラ、縣長ハ、一九四四
年以降日本人顧問ニ補佐サレタ。

治（オサム）集團ノ構成ハ、後ニ於テ東條首相ノ
約束ニ從ヒ變更サレタ。然シ指導的地位ハ、日本人
ノ手ニ依然握ラレ、「インドネシア」人ガ重要ナ地位
ニ居タ時ハ、常ニ日本人ノ本當ノ執行官ガキタノデ
アル。

一九四五年ノ昭和二十年ノニナツテ始メテ日本官
吏ハ實權ヲ「インドネシア」人ノ官吏ニ讓ツタ。

宣傳部ニヨリ發行サレタ日本人官吏ノ經歷書ニ依
レバ、此ノ集團ハ主トシテ殖民地タル臺灣、朝鮮カ
ラ集メラレテ居リ、或ル者ハ日本内地ニ於テ行政事
務ニタヅサハツテキタ者デアツタ。

爪哇以外ノ島々ノ新行政機構ノ確立ガ同様ノ線ニ
添ツテ行ハレタ。

最初ノ段階ニ於テハ「スマトラ」ト馬來ハ新嘉坡
駐在ノ陸軍司令官ノ許ニアル一行政單位ヲナシテキ
タガ後ニナツテ「スマトラ」ハ別ノ軍政監部ノ許ニ
置カレタ。第十六及二十五軍（夫々爪哇及ピ「スマ

トラ」ハ、最後ノ段階ニ於テ被垣征四郎ニ統率サ
 せレタ新嘉坡ニ司令部ヲ置ク第七地區軍ノ指揮下ニ
 アル事トナツタ。此ノ第七地區軍ハ兩万戦域ニアツ
 テ寺内元帥ニ統卒サレタ。
 軍政監部ハ、通商ノ命令系統ヲ通ジテ發セラレタ
 ル命令及ビ陸軍省ヨリ直接發セラレタル命令ノ双方
 ニ從ツテ事ヲナシタ。
 「セレベス」、「ボルネオ」並ニ「バリ」及ビ「
 マカツサル」海峽ヲ南北ニ通ズル線以東ノ凡テノ島
 ニ於テハ日本海軍ガ勢力ヲ有シテキタ。名稱ハ異ツ
 テキタガ、實質ハ異ツテキナカツタ。中央集權的行
 政ノ同ジ原則ガ用ヒラレ、日本人ト「インドネシア
 」人ノ關係ハ同様デアツタ。

海軍占領下ノ領土ノ行政（民政）ハ「セレベス」
「マツクアーサー」ノ民政府（司令部）ニ於テ行ハ
レタ。此ノ民政府ハ「スラバヤ」ニ司令部ノ在ツ
タ。第二南方艦隊司令官ノ指揮下ニ在ツタ。此ノ司
令部ハ「シンガポール」駐在ノ第七南方艦隊司令
官ノ統率下ニ在ツタ。

行政ノ再組織ト同様ニ司法機構モ全然改變サレ
タ。従前ノ裁判所ニ替ル爲メニ第一期ニ設置サレ
タ所ノ軍政法院ニ加ヘテ、軍會議即チ日本軍人其
他軍法會議ニ掛ケラルベキ者及軍律會議即チ軍令
ノ違反ヲ取扱フ軍法會議が存在シテキタ。

軍政法院自体モ亦此ノ軍政條令及規約ノ違反竝
ニ軍政府ニヨツテ効力アルモノト宣明サレタ。舊軍
令ヲ取扱フ管轄權ヲ有シテキタ。此ノ管轄權ハ軍
律會議ト共ニ扱ハレタ。

一九四二年九月二十六日附爪哇最高指揮官ノ軍
令第十四號ハ軍政法院ニ其ノ最終的形式ヲ與ヘタ。
孰レモ日本の名稱ヲ附シタ八種ノ裁判所ガ設置セ
ラレ其ノ中ニ最高法院（上訴ノ最終法廷）及高等
法院（上訴ノ中間法廷）ヲ包含シ、兩院ノ職員ハ
最初ニ於テハ全部日本人デアツタ。下級裁判所ハ
地方的行政細別ニ一致スル審察裁判所、地方裁判
所及其他區裁判所竝ニ二ノ特別宗教裁判所ニヨツ
テ構成サレ、孰レモ「インドネシア」人ニヨツテ

運営セラレ中間上訴裁判所ニヨツテ直接監督セラレ
タ。

各裁判所ニ檢察局ガ附置セラレタ。此制度ハ司法
部ノ下ニ強力ニ中央集權的デアツタ。後日ニ至リ檢
察局ハ司法部カラ分離サレ、治安部ト改名サレタ。警
察部ノ下ニ警察ト合併サレタ。

「インドネシア」人ニヨリ構成セラレ、其ノ開廷
ニ際シ憲兵ノ代表者ガ臨席シ檢察局ノ代表者ノ次ニ
着席シタ。

初メノ頃ハ從來ノ刑罰法規ガ用ヒラレタ。此ノ刑
法ハ極メテ民主的ナ地盤ヲ持ツモノナルコトガ分ツ
タノデ、一九四四年ニ廣イ範圍ノ解釋ヲ許ス不明確
ナ言葉ヲ以テ犯罪行爲ヲ定義スル新刑罰法規ガ日本
人ニ依ツテ採用サレタ。特殊ノ諸犯罪ニ就イテハ重
イ最低刑ガ規定セラレタ。

日本ノ占領期間中日本ノ行政機關ガ屢々「インド
ネシア」人裁判所ノ審理ニ干渉シタコトガアツタ。
事實上刑ヲ定メルノハ刑事審理ニ臨席シテキル憲兵
ノ代表者デアツタ。審理中ハ日本語及馬來語ノミガ
許容サレタ。軍事裁判所ノモノノ審理ハ日本語ヲ行
ハレ而シテ適切ナ通譯ハ減多ニ利用シ得ラレナカツ
タ。

東印度ノ他ノ島嶼ニ於テモ裁判權ハ同様ナ方法デ
行使セラレタ。従前ノ裁判所ガ廢止サレ新シイ日本
ノ裁判所ガ出來タ。

占領ノ當初ニ於テハ日本當局ハ爪哇ノ「スカブ」
ニ於ケル警察學校ヲ接收シタ。又各州ノ首都ニ
於テ日本人ノ指導ニ依ル警察官ノ永久的訓練制度ガ
確立サレタ。最後ニ既ニ勤務ニ就イテ居ル者
ニ對シ、大東亞ノ理想及日本ノ力ヲ教ヘル宣傳

課目ガ定期的ニ講ゼラレタ。輕微ナ違反行爲ヲ片附ケル爲現場或ハ警察署ニ於テ肉体的虐待ヲ爲ス日本ノ制度ガ設置サレタ。輕微ナ犯罪ニ對スル制裁トシテ虐待ガ街上ニ於テ毎日目撃セラレタ。
「インドネシア」警察隊ノ或ル一部ハ憲兵ノ遣方ヲ採用シタ。

後ニ公安部トナツタ獨立シターツノ警察部ガ集中ノ線ニ沿ツテ設置サレタ。ソシテ凡ユル行政業務ハ日本人ニヨツテ繼承セラレタ。

現存ノ警察隊ハ不十分ナリト日本側當局ニヨツテ感ジラレタ。此ノ狀態ヲ改良スル爲メノ各種ノ方法ガ企テラレタ。

憲兵補即チ「インドネシア」人ニヨル憲兵ノ延長ニシテ憲兵隊員ニヨツテ訓練セラレタノガ組織サレタ。ソウシテ一般人カラハ怖レラレ且ツ嫌ハレタ。

一九四三年四月ニハ全テノ村ト都市ニ於テ補助警察隊トシテ警防團（部落警備隊ノ一種）ガ組織サレタ、此ハ正規ノ警察隊ヲ約一三〇萬程増強セシメタ。警防團ハ各種ノ任務ヲ持ツテキタ。火事ヤ其他ノ災難ノ際ニハ活動セネバナラナカッタ。聯合國ノ墜落シタ飛行機ノ搭乗員、落下傘兵其ノ他ノ捕縛ニ於テ正規ノ警察ヲ援助セネバナラナカッタ。其地域ニ於テ二十四時間ノ警備任務ヲ行ヒ、大衆宣傳會ニハ

大勢テ出掛ル事ヲ行ツタ。主ナル任務ハ間諜行爲ニ
アツテ主トシテ敵ノ「スパイ」ニ對スル一般活動デ
アツタ。

一九四五年ニハ此等ノ警防團ハ竹槍ノ如キ全ク不
十分ナル武器テ通信連絡線ノ切斷敵小部隊ノ擊破等
ノ「ゲリラ」活動ニ大衆ヲ訓練スル爲利用サレタ。
此訓練ハ外人ニ對スル恐怖ト西洋人ニ對スル憎惡ト
ヲ單純ナル農夫運ニ教へ而シテ是等外人ニ對スル殘
虐行爲ノ野蠻ヲ發揮ヲ生ゼシタ。

警察ノ補助トシテ第三ノ團體ガ一九四五年初期ニ
設置サレ警防隊ト呼バレタ。此ノ警防隊ハ町ノミデ
活動シ警防團ト同ジ目的ノ爲メ働イタ。其ノ要員ハ
主トシテ中國人カラ召集サレタ。

憲兵補ハ憲兵ノ一部デアリ他方警防團ト警防隊ハ共
ニ日本人ニヨツテ指導サレ且訓練サレタガ正式ナ陸
軍編成ノ中ニハ加ツテハキナカッタ。最後ノコノ二
ツノ要員ハ義勇隊員デアツタガ若シ所要ノ人員ガ滿
サレナカッタトキニハ殘餘ハ召集サレタノデアル。

刑務所制度モ同様ニ日本側ノ指示ニヨツテ再組織
サレタ。新入者ノ訓練ト古參者ノ「改善」ノ爲メニ
教育ガ實施セラレタ。日本の名稱標示ガ導入サレタ。
囚人ノ取扱ハ非人道的デアツタ。

軍政部ハイインドホシア人ノ學校ヲ再開スル爲ニ教育
計畫ノ再組織ヲ始メタ。

國民學校ノ初等教育ガ再組織サレタ。日本語、日
本ノ唱歌ト舞踊ノ教育及ビ日本式ノ體操ガ課セラレ
タ。他ノ授業科目、即チ讀方ト算術ノ教授ハ非常ニ短
縮サレタ。其他ノ課目ハ廢止サレタ。

夫々多様ナ授業課目ヲ有スル教壇ノ中等學校ハ廢
止サレ一定ノ課目ヲ有スル標準型中等學校ガ之ニ代
ツタ。コノ學校ハ尋常科ト高等科トニ分レタ。課目
ハ非常ニ簡單ニナツタ。即チ讀外國語ト一般歴史ハ
削ラレ日本語ト日本歴史ガ之ニ代ツタ。蘭印諸島ノ
歴史教科書ハ燒却サレ代リニ新教科書ガ使ハレルヨ
ウニナツタガソレハ日本人ト人種ガ同種ナルコト及
日本トハ共同ノ運命ノ絆ニ結バレテキルコトヲ強調
シタモノデアツタ。

全然新タナ問題トシテハ青少年ニ大東亞共榮圈ノ
理想ヲ教ヘルタメ「精神科」「精神ハ凡ユル物質的
障礙ニ打勝チ得ル」トノ學デアツタ。青少年達ハコ
ノ精神ヲ、必要ナラバ竹槍ヲ持ツテ戰車其他ノ近代
兵器ト戰ヘト鼓吹サレタ。

職業學校ハ日本人ノ思想ニ適應スルヤウニ再組織

Doc 2750

サレタ。

バタビア醫科大學ガ「新生瓜哇ノ建設」記念日一
九四三年三月九日ニ「醫科大學」ノ名デ再開サレタ。
最初ノ~~本校~~^長日本人ノ教授デ九名ノ新任インドネシ
ア人教授ガ輔佐シタガ大部分同校ノ以前ノ助教達
デアツタ。六ヶ月後コレヲ九名ノインドネシア人教
授ハ助教授ニ格下ゲサレ日本カラ新着ノ日本人教授
ガ之ニ代リ日本語テ教ヘタ。日本語ノ授業ハ最初カ
ラ強制的デアツタ。

學生ハ卒業後日本ノ軍政部ニ勤務スルコトヲ誓約
セシメラレタ。學生達ハ寄宿舎ニ入り日本ノ偉大ナ
ルコト、大東亞共榮國ノ理想トヲ講義シテ聞カセタ
トコロノ特ニ任命サレタ日本人監督者ノ下デ嚴格ナ
半軍隊式訓練ヲ受ケタ。

ソノ醫科大學ノ授業課程ハ六年カラ四年ニ短縮サ
レタ。

文科、法科及工科ノ大學ハ再開サレナカツタ。乍
然一九四四年、前ト同様三月九日ニ三年制デ課目ガ
制限サレタ一種高等職業學校ノ様ナモノガ開カレタ
學生達ハ上述同様ノ日課ヲ受ケタ。

法科大學ノ代リニ文官ト法律家ヲ養成スルタメノ
一年制ノ教育カ行ハレタ。

多クノ時間ガ大東亞共榮國ノ理想ト日本ノ偉大サ
ヲ教ヘルコトノ爲メニ費サレタ。學生ニ對スル同様
ナ一律化カ施行サレタ。日本語ノ教授ガ一重要部門
ヲ占メタ。

私的的教育ハ長期間禁ゼラレタ。一九四三年及一九
四四年ニインドネシヤ人ト中國人ニ對シニ、三ノ政
ル從來ノ私立學校ガ再ビ組織スルコトヲ許サレタ併
シ其ノ學課ハ公定ノ筋目ニ從ハネバナラナカツタ。

西洋ノ教育並ニ西洋人ニ教育スルコトハ占領地全
部ニ亘リ禁止サレタ。此ノ禁止ハ嚴重ニ實施サレタ。
而シテ單ニ西洋人ニ教育ヲシタ疑カアルト言フ事ダ
ケデ憲兵ニ捕ヘラレルニ充分デアツタ。

大勢ノインドネシヤ大學生、大學卒業生及インド
ネシヤ社會ノ優秀ナ人々ガ日本ニ派遣セラレタ。全
島カラ新聞記者ノ一行ガ大東亞新聞記者會議ニ出席
ノ爲メ日本ニ連レテ行カレタ。

社會ノ總ベテノ部門ガ「フアシスト」化シタ團體
ニ組織サレタ。

社會ヲ組織化シ政治的ニ統合スルコトガ凡ユル民族及政治的團體並ニ殆ンド總テノ職業層及商業從業者、殆ンド總テノ社會經濟部門、總テノ文化團體總テノ宗教團體、青年層、體育團體及婦人運動ノ中ニ實施セラレタ。

日本ノ當局ハ是等ノ組織ヲ通ジテ或特殊ノ社會團體ヲ確實ニ把握シテ居タソシテ其ノ會員ヨリ軍又ハ軍政府ニ對スル助力ト支援ヲ掌握スル爲ニ、是等ノ組織ヲ用ヒタ。

××××

××××

夫等ノ團體ハ民衆大會中定期的ニ大舉出動ヲ命ゼラレタ、又會員間ニ宣傳ヲ行フ爲ニ利用サレタ。

日本人ハコレラノ團體ヲ與ニ變化ニ通ジ又間諜行爲ヲ行フ爲ニ用ヒタ。宣傳部ハコレラノ組織ト密接ナ關係ヲ保ツテキタ。コレラノ組織ニ於ケル「インドネシア」官吏ノ演說ハ單ニ事前檢閲ヲ受ケタノミデナク、普通ハ宣傳部ニ依ツテ起草サレサヘシタ。是等ノ團體ハ軍政監部ノ嚴密、嚴重ナ監督下ニアツタ。

同一ノ目的ニ供セラレ、同一ノ方針ニ從ツテ是等

諸種ノ団体ハ、構成サレタ。瓜哇日本總司令官ニ依
ツテ公布サレタ布告ニ從ツテ設立サレタ。コノ布告
ノ第一條ハ殆ンド凡テノ團體ニ對シテ同一デアリ、
團體ノ設立目的ハ日本軍政府ヘノ支持デアルト述べ
ラレテキタ。

コレラノ団体ノ理事ハ日本當局ニ依リ任命サレタ。
支部理事ハ中央部理事ニ對シ責任ガアツタ。兩者共
日本當局ニヨリ任命或ハ承認サレタ顧問會ニ依リ、
補佐サレテ居タ。

一 團體内ノ執行機關ハソノ會員ヲ束縛スル規定ヲ
作ル權限ヲ與ヘラレテ居リ、會員タルコトハ或集團
内ノ全員ニ對シテ義務トサレテキタ。

代表的ナ例ハ、一九四三年八月三日付瓜哇總司令
官布告第二十八號ニ依ツテ設立サレタ瓜哇醫學奉公
會（瓜哇在任醫業者ニ依ル奉公團體）ニ於ケル醫師
齒科醫師、薬剤師ノ団体デアル。ソレハ左ノ事項ヲ
有シテ居タ。

第一條、瓜哇醫學奉公會ハ瓜哇ニ於テ醫業ニ從事ス
ル者ノ知識及人格ヲ陶冶シ、ソノ治療及ビ衛生管
理ノ能力ヲ擴充、昂揚シ、依ツテ醫學ニ於テ大日
本軍ニ最大ノ貢獻ヲナサンガタメ、彼等ヲ統合ス

38.

Doc 2750

ル目的ヲ以テ設立サル。

第四條、日本國民ニ非サル瓜哇在住ノ醫師、齒科醫師並ビニ醫術熟練者ハ、敵國人ヲ除キ醫事奉公會會員タラザルベカラズ。

Doc 2750

第八條、第七條ニ掲ゲラレタル事項以外ニモ、
醫事奉公會ハ軍政官ノ命ニ依リ、軍政實施ニ
必要ナル特殊業務ヲ行フ。

第九條、醫事奉公會々長ハ軍政官ノ承認ヲ得テ、
第七、八條ニ規定セラレタル業務ヲ執行スル
タメニ必要ナル命令及ビ指圖ヲ行フコトヲ得。

第二十一條、醫事奉公會ハ軍政官ノ監督ヲ受ク。
支部職員ノ業務ハ州長官ノ監督ヲ受ク。

辯護士、新聞記者、並ビニ全部トハ言ハヌマデモ、
大部分ノ他ノ職業モ同様ニ單一團體ニ組織セラレ
タ。

經濟活動ノ全分野ニ於テモ強制組合員制、一方的
統制規則統一目的及ビ日本人ノ理事者等、同様ノ
有様デアツタ。

凡テノ美術家及ビ學者ハ、啓民文化指導社ニ組織
サレタ。純東洋的ナ美術表現ノ重要性ガ強調サレ、
西洋的ナ影響ハ有害ナリト考ヘラレタ。繪畫其ノ
他ノ藝術作品ハ、ソノ藝術的價値ヲ問ハズ、單ニ
大東亞共榮圈ニ對スル功績ヲ以テ問題トサレ、評
價サレタ。コノ團體ハ一九四三年三月ニ設立サレ、
他ノ團體ト同様ノ性格ヲ持ツテ居タ。即チ日本人
理事者、陸軍及ビ軍政府ニ對スル強制的支持、其

70.

Doc 2750

他デアツタ。
日本人ハ青年ノ精神訓練ヲ極メテ重要視シ、コノ
事業ヲ完全ニ彼等ノ手中ニ收メタ。インドネシヤ
青年運動ハ最初ハ公認サレタガ、一九四三年中頃
禁止サレタ。

一九四二年十二月早々、爪哇ノ日本軍司令官ハ大東亞共榮圈ノ善良ナル住民タルタメノ青少年ノ訓練ハ日本ガ及ブ限リノ事ヲ爲シテモ尙充分トハイヘ又程コノ上ナク重要ナモノデアルト宣言シタ。青少年ノ指導竝ニ訓練ノ事ハ専ラ日本人ノミノ仕事トサレテキタ。コノ管理機關ハ一九四三年四月ノ爪哇青年團ノ創立ヲ以テ設立サレタ。

爪哇青年團設立ノ目的ハ左ノヤウニ記サレテキタ。

「爪哇青少年ガ奮然軍政府ト協力シ大東亞共榮圈建設ニ助力スルヤウ彼等ノ自覺ヲ促ガスタメ彼等ヲ指導訓練スル事ヲ要ス」

各州ニ地方指導者養成ノ爲ノ日本側ニ依ル訓練ノ中心ガ設定サレ中央訓練所ガ「バタヴィア」近在ニ開設サレタ。之ガ總テ日本人ノ指導命令下ニアツタ。

後ニ各縣各市ニソレゾレ大凡大隊程度ノ人數ノ青年團ガ組織サレタ。或工場ハ自ラノ青年團ヲ作ツタ。是等ノ青年團ハ軍事的色彩ヲ持テ爪哇聯合青年團ニ編入サレ、日本陸軍將校竝ニ軍政府員ニ指揮サレタ。

年齢限度ハ十四才乃至二十五才ニ定メラレ、モン義勇兵ガ不足スルト更ニ多クノ者ガ徵發サレタ。健康状態好適者ダケガ入團ヲ許可サレ、ソレ等ノ者ハ大東亞共榮圈建設ニ對スル熱意ニ就キ試験サレタ。

正式ノ訓練ハ日本語ノ會話及ビ書方ノ教授、精神訓練、軍事訓練、日本式体育、對空防禦、日本音樂、

42.

Doc 2750

舞踊等カラ成ツテキマシタ。
一九四三年九月ニ組織サレタ防衛義勇軍ニ對スル人
員ノ大部分ハ青年團ヨリ供與サレタ。コノ青年團設
立直後他ノ青少年團體ハ一切禁止サレタ。
運動モ亦統制サレタ。一九四三年八月二十一日体育
會ガ結成サレタ。ソノ体育會ハ他ノ諸國ト同様ノ構
想ノモノデアツタ。コレニ適用サルベキ布告ノ公式
解説ニ次ノヤウニ述べラレテル。

「爪哇體育會ハ事務所僱員カラ學費ニ至ル迄ハ爪哇ニ於ケル全大東亞同胞ノ運動界ト警防口及青年口ノ運動界ヲ包括スルモノデアアル。我々ノ心身鍛鍊ノ上ニ、紀律ヲ學ビ之ヲ向上セシメル上ニ、勤勞精神及勤勞意欲強化ノ上ニ、如何ニ運動ガ重要ナルカヲ想ヘバ本體育會ハ大東亞戰爭ニ對シ大ナル重要性ヲモツモノデアアル」

各縣各市ニ一ヶ所ツツ支部ガ設ケラレタ。コレヲ文部ハソレゾレノ州ニ於テ組織サレソレラガ又爪哇體育會ニ從屬シテキタ。

爪哇ノ「インドネシア」婦人ハ一九四三年八月
中ニ創立セラレタル婦人會ニ編入サレタ。

其ノ目的及ビ業務ハ左ノ如ク定メラレタ。
「本機關ノ目的ハ原住民ノ婦人ノ地位ニ相應シキ努力ヲ以テ大日本軍ヲ援助シ且ツ婦徳ヲ向上セシムルニアリ。軍政府ノ行動ヲ援助スルタメ事業部ガ婦人會内ニ設ケラレテ居ル。此機關ハ銃後ノ状態及ビ貯蓄、教育、公安、公衆ノ衛生ノ方面ニ於ケル状態ノ改善ニ必要ナル事業ヲ遂行シナケレバナラナイ。」

戰爭中國防ノ努力ニ對スル婦人ノ責務ニ於ケルソノ自覺ヲ深メルタメ先ツ第一助トシテ婦人會ハ講演會及ビ講座ヲ開クコト及ビ將來敵軍有リタル

Doc 2750

トキ、其ノ業務ガ成ル可ク立派ニ進行シ得ラル、
様ニ訓練實施ニ當ツテハ青年團及ビ警防口ト密接
ナル連絡ヲ保ツコトガ許サル、デアラウレ

他ノ島嶼ニ於ケル進展ハ暗爪陸ニ於ケルモノト
同様デアツタ

然シモツト進歩ノ遅レテル人々ノ間ニ生活シテ
キル日本人ハ彼等日本人自身ノ間デモ其ノ能率標
準ガ低ク同時ニ日本人ノ重要ナ糧倉ニシテ兵站基
地タル爪陸ニ於ケルヨリモ地方人ノ協力ニ頼ル所
少ナカツタメ彼等ハヨリ單純ナ考テ政治的統合
ノ工作ニ取り掛ツタノデアル。

44.

三、第三段階

自一九四三年（昭和一八年）七月至一九四四年（昭和十九年）九月。

第一期間ノ頃既ニ、日本當局ハ或ル活動ヲシテ居タノデアルガ然シ地方的ニ採ラレタ政策ハ、在「バタビ」海軍連絡將校ニヨツテ所謂「日和見」主義トシテ特質ヲ示シテキルモノデアツタ。

占領直後、一種ノ禁止ガ一九四二年（昭和十七年）三月八日附爪哇ノ軍司官布告第二號第二條テ規定セラレ、次ノ如ク記載サレテキル。

「差當リ左ノ專項ヲ禁止ス

(イ) 結社、集合、逆宣傳、及貼紙」

一九四二年（昭和十七年）三月二十日附布告第三號ニヨリ更ニ「言論、行動、示唆又ハ宣傳ニシテ政治ニ關スルモノ」ヲ禁止シタ。

此ノ禁止ニ依リ、或「インドネシア」人國家主義指導者ハ、一九四二年（昭和十七年）四月憲兵ニ逮捕セラレ、其ノ中ノ僅カ數人ガ相當時日ヲ經タ後、漸ク釋放サレタニ過ギナイ。

一九四二年（昭和十七年）十二月ヨリ一九四三年（昭和十八年）一月ニカケ、排日的ト解シ得ル種ノ地下工作ニ従事セル「インドネシア」人ニ對シ大規模ヲ檢舉ガ行ハレタ。此等ノ人々ハ死刑ヲ宣告サレタ者或ハ獄死セル者ヲ除キ、一九四五年（昭和二十年）九月迄釋放サレナカッタノデアル。一九四三年（昭和十八年）一月以後ニ於テサヘ尙、憲兵ハ周到ニ凡ユル地下工作ヲ監視偵察シ續ケ、其ノ結果實ニ莫大ナ犠牲者ヲ出シテキル。

一九四二年（昭和十七年）日本ハ三亞運動ニ着手シタ。此ノ名稱ハ、次ノ標語ヲ表ハシタ大キナ、ピラ上ニ發表セラレタノデアル。

亞細亞ノ保護者 日本、

亞細亞ノ指導者 日本、

亞細亞ノ光 日本、

亞細亞ノ爲メノA A Aハ他ノ文字ヨリ大キク又一層目立ツ色デ印刷サレテアツタ、本運動丹誠ノ主題ハ「亞細亞人ノ爲ノ亞細亞」デアツタ「白色人種ニ屬スル外國人」及ビ「西洋ノ開發者」ニ對スル憎惡デアツタ。之ニ反シ、日本人

ハ「インドネシア」人ト同人種同祖先デアルト説
カレタノデアツタ。

「日本人ト同一祖先ヲ持チ同一人種デアル」「イ
ドネシア」人」ト云フ詞ハ一九四二年（昭和十
七年）三月七日附日本軍司令官布告第一號第一
條ニ出テ居ルノデアアル。西洋勢力ハ東洋精神ノ
腐敗ナリト言ハレタノデアアル。日本ハ亞細亞民
族ノ救済者ナリト云ハレ、又日本ノ「親心」指
導精神下ノ大東亞共榮圈ハ、亞細亞諸國民ヲ解
放スルモノデアアルト言ハレタ。「新シイ爪哇」
又ハ「爪哇ノ新秩序」ト云フ標語ハ別トシテ、
大東亞共榮圈ノ爪哇ニ對スル意味ハ説明サレナ
カツタ。「インドネシア」ナル語ヲ政治的意味
ニ用ヒルコトハ許サレナカツタ。多クノ公式發
表ニハ「インドネシア」人ハ「原住民」ト言ハ
レテ居タノデアアル。

三亞運動全盛ノ間ニ「インドネシア」人界特ニ
從來ノ統治及ビ其ノ統治ノ獨立準備ノ速度ニ不
滿ヲ持ツテ居ル者ニ對スル一層ノ接觸ガ求メラ
レタ。

此等ノ中ノ主ナルモノハ、一九四二年（昭和十七年）七月ニ憲兵隊ガ爪哇ニ連レテ來タ（技師）「スカルノ」デアツテ、彼ハ他ノ三名ノ國家主義者ト共ニ所謂「アンバト・セラシカイ」（四葉ノ「クロイバル」）ヲ組織シタ、此ノ人々ハ日本ノ監督下ニ於テ日本ニ協力セントスル國家主義者ノ指導者トナツタ。此ノ四ツノ「セラシカイ」ハ、日本ノ約束中ニ、彼等ノ希求セル速カナル獨立ヲ得ル手段ノアルヲ知ツタデアツタ。彼等ハ此等ノ約束ヲ信ジ、日本軍政監部トノ完全ナ協力ヲ提唱シタデアツタ。

日本軍ハ又以前ノ統治ニ對シ何等ノ不満足ヲモ抱イテ居ラズ、其ノ下ニアツテ高官ニ就イテ居タ「インドネシア」知識級人ノ「グループ」ニモ接近ヲ求メタ。日本軍司令官ハ一九四二年（昭和十七年）十二月ニ「舊慣制度調査委員會」ナルモノヲ設立シタ。即チ「該地ノ慣習及ビ舊政治制度ヲ調査研究シテ爪哇統治ニ資スル爲」デアツタ。議長ヲ含ム九名ノ日本人ト、「四葉」ノ「クロイバル」以前ノ諸部長、以前ノ教授及ビ人民委員會ノ會員ヲ包含スル十名ノ「インドネシア」人が此ノ委員會ニ席ヲ占メタデアツタ。此レハ重要ナ

Doc 2750

ル役割ヲ演ジタコトハ無ク、一九四三年（昭和十八年）十一月日本側ニヨツテ廢止サレタ。

「四」「セラシカイ」ニ依ツテ日本當局ニ對シテナサレタ最初ノ要求ハ、黨組織ノ許可デアッタ。此ノ要求ハ、一九四二年（昭和十七年）十二月八日迄審議中デアッタガ、眞珠灣ノ記念式ニ際シ「バタビヤ」ニ於テ一大宣傳會ガ催サレタ節、軍司令官ハ「インドネシア」人ノ爲ニ單一政黨ノミヲ許可スル旨公ニ約束シタノデアッタ。

本約束ノ履行ハ東京ヨリノ決定ヲ待タナケレバナラヌモノデアッタ。

一九四三年（昭和十八年）三月九日「ブテラ」運動が創メラレタ。其ノ名稱ハ「ブサット・テナガ・ラヤット」ト言フ語ノ象徴的ノ略號デ、同名ヲ「口民精神力ノ中心」ト言フコトヲ示シ、一方「ブテラ」ハ「騎士ノ息子」ヲ意味スルモノデアル。

其ノ目的及方針ハ前ニ論ジタ語口体ノ夫ト大体同ジデアツタガ、只此ノ民衆運動ノ名前ガ日本語デナク馬來語デアル點ダケガ違ツテキタ。「ブテラ」ハ政黨デハナク單ニ指導者ト顧問會議トヲ持ツタ運動デアツタ。

指導者選ハ軍司令官ニ依ツテ任命サレ、日本人ト「インドネシア」人トガ略々同數ノ顧問會議ノ援助ヲ受ケタ。此ノ「インドネシア」人ハ軍政監ノ承認ヲ受ケテ指導者ノ長ガ指名スルノデアル。各地方ノ指導者ハ日本軍ノ承認ヲ受ケテ指導者ノ長ニ依ツテ任命サレタ。

「ブテラ」ノ組織ハ軍司令官ノ定メル規則ニ依ツテ行セラレ、ソノ目的ハ日本軍ニ依ツテ公式ニ次ノ様ニ發表サレテキタ。

「民衆ノ力ト勢力トヲ振ヒ起ス目的ハ大東亞ニ於ケル終極ノ勝利ヲ獲得スベキアラユル手段ヲ支持スルコトニ外ナラナイ。

此ノ運動ノ爲スベキ仕事ハ六日本軍政監部ノ政
策ト緊密ニ結び付ケラレテ居ルノデアアルカラ、
總テノ指導者ハ彼等ガ六日本軍ノ狙ヒト目的ト
ヲ充分ニ知り且之ヲ信ジナケレバナラヌト謂フ
コトヲ念頭ニ置カナケレバナラナイ。レ
此ノ演説ニ於テ「ブテラ」ノ指導者達ハ更ニ次ノ
ヤウニ言ヒ聞カサレタ。

「現在ノ情勢ニ於テ現ニ存スル諸制約ヲ充分ニ
知ル様當ニ全力ヲ盡シ、一般民衆ヲ迷ハセル様
ナコトヲシテハナラヌ。余ハ貴下方ガ此ノ運動
ノ狙ヒト目的トヲ實行スル爲ニ全力ヲ盡スト共
ニ、大東亞共榮國ノ確立ニ協力シ、大東亞共榮
國構成國家ノ一員タルベキ新爪哇ヲ建設セラレ
ンコトヲ希望スル」

「ブテラ」ノ機能ハ以下ノ十項目中ニ公式ニ定メ
ラレテ居タ。

- 一、「インドネシヤ」人民ニ新爪哇建設ニ關ス
ル其ノ義務ト責任トヲ銘記サセルコト。
- 二、西洋勢力ヲ除去スルコト。
- 三、大東亞防衛ニ参加スルコト。
- 四、窮極ノ勝利獲得ノ爲必要ナル一切ノ精神的
肉体的艱難ニ耐エル自己訓練ノ精神ヲ培養
スルコト。

- 五、日本人及び「インドネシア」人間ノ相互理解ヲ深メルコト。
- 六、日本語研究ヲ奨励スルコト。
- 七、「インドネシア」人民ノ標準ヲ高メ、其ノ知能及び人格ヲ啓蒙スルコト。
- 八、人民体位ノ向上ノ爲、保健及び「スポーツ」ヲ奨励スルコト。
- 九、節約、貯蓄ヲ奨励スルコト。
- 十、分野ニ於ケル生産増強ヲ奨励シ、労働變ノ精神ヲ發達セシメルコト。
- 「ブテラ」ハ「インドネシア」人ヲ對象トシタモノデアツタ。日本人ニ依ツテ發ラサレタ新社會階級組織ハ次ノ階級カラ成立ツモノデアツタ。一日本人、二「インドネシア」人、三其ノ他ノ亞細亞人、四「インドネシア」人ト他ノ區分ニ屬スルモノトノ混血人、五歐洲人。是ニ依テ「インドネシア」人ハ「原住民」デアアル爲特權ヲ有スル部類トシテ待遇セラレ、一方三乃至五ノ區分ノモノハ外國人トシテノ待遇ヲ受ケ、歐洲人及亞混血人ハ最モ惡イ待遇ヲ受ケタ。
- 「ブテラ」ノ設置ト略々同ジ頃、所謂「外國人」ノ旅行制限ガ強化サレタ。更ニ如何ナル人モ自分ノ居住地以外ノ若ク宿泊サセル時ハ直チニ警察ニ

届ケ出ルヤウニ命ゼラレタ。更ニ爪哇島南岸一帯ト東西兩端ヲ含ム「立入禁止地區」ガ設定サレ、同地區ニハ「外人」ハ全然入ル事ヲ許サレズ、「インドネシヤ」人デサヘモ之ニハ通行證ヲ要シタ。

「ブテラ」ニ對スル最初ノ非常ナ熱意ハ、人民ガ期待ヲカケテ居タ此ノ口体ノ活動ガ日本ノ宣傳機關ニ依ツテ規定サレタ根本原則ニ全面的ニ制限サレテシマフコトガ明カニナツテ來タ時、衰ヘテシマツタ。最初計畫サレタ「ブテラ」ノ青年運動ガ禁止サレ、日本官憲ガソノ代ニ彼等自身ノ青年運動ヲ創設シタ時ノ失望ハ非常ニ大キカツタ。

一方、東印度以外デハ大變化ガ起ツテ居タ、即チ日本ハ攻勢カラ守勢ヲ取ルコトヲ餘儀ナクサレ、連絡路ハ重大ナ脅威ヲ受ケテ居タ。

コノ背景ニ對シテ、一九四三年（昭和十八年）六月十六日、東條首相ハ帝國議會ニ於テ演說ヲ行ツタ。ソノ中、就中、彼ハ爪哇ノ人民ガ進ンデ日本軍政監部ニ協力ヲ示シ來リシ事實ニ鑑ミ、彼等ハ政治ニ參加スル事ヲ與ヘラルベキデアルト述べタノデアアル。此ノ際東條首相ハ亦所屬獨立ヲ緬甸及ビ比律賓ニ約シタノデアアル。

Doc 2750

此ノ約束ニ從ツテ東條首相ハ自カラ南方地域ヲ訪レタ。

爪哇ヘノ途上、東條ハ馬尼刺及新嘉坡ヲ訪レ比律賓及緬甸ニ對シテ獨立ノ約束ヲ練リ返シテキルノデアアル。爪哇ニ於テハ獨立ハ許サレズ唯政治ヘノ參與ノミガ約サレタノデアツタ。右約束ニハ之ニ關聯シテ終局ノ勝利ヲ博スル爲日本軍政監部ニ完全ニ協力スルト言フ條件ガアツタノデアアル。

此ノ約束ニ從ツテ一九四三年ノ昭和十八年ノ八月二日インドネシヤ人ハ宗務部々長ニ任命サレタ。但シ實權ハ相變ラズ諮議ノ長タリシ日本人ノ手ニ在ツタ。ソシテ他ノ二名ノ者ハ爪哇ノ二ツノ最モ小サイ行政區ノ州長ニ任命サレタ。但シ實權ハ日本人ノ副州長ガ掌握シテキタ。更ニ多數ノ「インドネシア」人ガ低地位ニ公式ニ任命サレタガ右ノ地位ハ先ニ之等ノ人々ガ就イテキタ地位デアツタ。ソシテ彼等ハ日本治集區ニ編入サレ日本ノ相當官ノ位階ヲ與ヘラレテキタ。

「參與制度」ナルモノガ設ケラレ「インドネシア」人ハ七部ノ參與ニ薦舉サレタ。參與ハ唯問題

554.

ガ自分ニ諮詢サレタ時ニ於テノミ其ノ役ヲ勤メタ
ノデアアル。

凡ユル行政區及「バタビヤ」ノ特別市ニ其行政
官ニ對シテ地方政治ニ關スル助言ヲ與ヘル爲諮詢
機關タル參議會ガ一九四三年ノ昭和十八年ノ九月
五日附軍司令官軍政令第三十七號ニ依リ設置サレ
タ。此ノ政令ハ任命サレ選舉サルベキ各參議會ノ
議員數ヲ各々規定シタ。

選舉ハ間接デ候補者ノ指名ハ公開デナク又投票
ハ秘密デハナカツタ。

參議會ノ職務ハ州長ニ依ツテ提出サレル地方政
治ニ關スル質問ニ答ヘ又提出サレタ問題ニ關シテ
提案スル權限ヲ有シテ居タ。其レハ州長ヨリノ命
令ガアル場合ニノミ會合スルコトガ出テタ。會議
ノ開會及閉會ハ州長ノ命令ニ依ツテ行ハレタ。州
廳ノ官吏違ハ會議ニ出席シ討論ニ參加スルコトガ
出來タ。

會議ガ公ニ行ハレタノハ開會演說ノ時ト閉會ノ
時デアリ此ノ開會演說ハ前以テ起草サレ檢閲サレ
タノデアアル。實質上ノ會議ハ秘密ニ行ハレタノデ
アル。最後ノ會議ニ於テ、秘密會ニ於テ討論決定
サレタ提議ハ模擬投票ニ附セラレタ。夫故凡ユル

提議ハ常ニ滿場一致ヲ以テ議決サレタ。會議ハ殆
ト四、五日以上續イタコトハナイ。議長ハ議員ノ
中カラ州長ノ任命ニ依ツテ定メラレタ。各參議會
ハ爪哇ノ中央諮問機關タル中央參議院ニ代表者ヲ
送ツタ。是ハ一九四三年ノ昭和十八年ノ九月五日
ニ軍政令第三十六號ニ依リ「軍政ノ強力適切ナル
進展ヲ期スル爲」設置サレタ。四十三名ノ議員中
二十三名ハ軍司令官ニ依ツテ任命サレタ。其ル者
ノ中十八名ハ各行政區參議會ニ依ツテ選舉サレタ。
二名ノ議員ハ同級君主領ニ依リ任命サレタ。其手
續ハ地方參議會ノモノト同ジデアツタ。

彼等ハ軍司令官或ハ州長ノ提出セル質問ニ對シ
助言ヲ與ヘ其ニ關スル提言ヲ爲ス權限ノミヲ與ヘ
ラレテキタノデアアル。參務ノ實際上ノ指揮權ハ中
央參議院參務局長ノ手ニ在ツタノデアアル。彼ハ彼
ノ局ノ他ノ職員ト同ジク日本人デアツタ。同局ノ
職務ハ中央參議院ノ活動ノ内部的監督及ビ信譽ノ
出入ヲ取扱フ事デアツタ。局長及職員ハ軍司令官
ニ依ツテ任命サレタモノデアリ最初ノ局長ハ東條
首相ノ私設秘書デアツタ。
同様ニ參議會ノ書記ハ常ニ州廳ヨリノ日本人デ
アツタ。

全ク最初ヨリ、此ノ組織ハ各軍事組織ノ爲勞働力及志願者ヲ動員スルト共ニ住民ヲ激勵シテ農産物ノ生産増強及軍政監部へ是等農産物ヲ供出サセル目的ヲ日本軍ノ宣傳機關トシテ用ヒラレタノデア
ル。

尙此ノ外ノ地方參與方策トシテハ初等教育、低水準ノ地方行政、公共衛生及農業等ニ於テ從來ヨリ廣汎ナ行政權力ガ中央爪哇ノ回教君主ニ與ヘラレタ事デア
ル。

中央參議院ノ設立ト殆ンド同時ニ、後ニナツテ軍司令官ガ公式ニ聲明シタ様ニ、日本軍政監部ハ東條首相ノ約束ガ今ヤ事實トナツテ現ハレタノデア
ルカラ、爪哇ノ「インドネシヤ」民衆ハ之ガ感謝ノ意ヲ具体的ニ表明スベキデアルト共ニ、日本軍政ヲ喜ンデ支援スルコトヲ示ス爲ニ義勇隊ヲ組織スルコトハ彼等ノ義務デアルトノ意見ヲ抱イテキ
タノデア
ル。

右宣傳部ハ原住民自体、彼等ノ軍隊ヲ持ツコトヲ希望シテ居ル様ニ外ノ世界ニ見エルダラウト保證
シタ。

一九四三年ノ昭和十八年ノ八月ノ終ニ「スカ
ル」ノ一舊友ガ義勇軍ヲ組織スル許可ガ得度イト
軍司令官ニ對シテ「自己ノ血液ヲ以テ」署名シタ

歎願書ヲ、多數ノ此ノ様ナ歎願書ヲ提出シタ者ノ中テ第一ニ提出シタ。軍司令官ハ一九四三年ノ昭和十八年ノ十月初ニ、彼ハ是等ノ歎願ハ許可シ度イ氣持ヲ有スルコト及爪哇民衆ガ東條ノ約束ニ對シテ何等カ報ヒ度イト希望スルノハ至極尤モト思フト聲明シタ。一九四三年ノ昭和十八年ノ十月三日付、軍政令第四十四號ニ依リ、彼ハ郷土防衛軍ヲ設置シタ。

此ノ軍ノ目的ハ「大東亞共同防衛ノ精神ニ則リ爪哇防衛ノ爲、原住民（即チ「インドネシヤ」人）ヲ糾合」スルコトデアツタ。

第四條ニ曰ク。「爪哇防衛義勇軍ハ郷土防衛精神ニ徴シ、（大日本軍ノ指導ノ下ニ）／＼括弧内原文ニナシ、英譯ニ在リ／＼米英蘭ニ對シ各州郷土ノ防衛ニ任ズ」ト。

此ノ軍政令ニ基キ、義勇軍ハ爪哇軍司令官ニ依ツテ統率セラレタ。此ノ軍ハ日本軍ノ一部ヲナスモノニ非ザルコトトソレ自身ノ將校團ヲ持ツテハキルガ日本人ノ指揮官ニ依ツテ訓練サレルコトガ強調サレタ。其ノ軍ハ爪哇以外ニハ使用サレズ、亦義勇兵ヲ以テ組織サレルコトデアツタ。

最初ノ兵員徵募ガ直チニ始マツタ。然シ兵員徵募ヲ續ケテミルト熱意ガ不充分ト見エタノデ、新

規徵募毎ニ義勇軍ノ陣容ヲ強化スルタメニ幾人ノ「志願兵」ヲ必要トスルカヲ各行政地區ガ通告ヲ受ケタ。日本軍ノ宣傳ノ主ナル活動ハ此ノ軍ノ徵募ニ應ズル様ニ激勵スル事デアッタ。

一九四三年ノ昭和十八年ノ十月「將校」ノ養成ガ始メラレテ之ハ三ヶ月間續ケラレタ。

其ノ目的ハ一州ニツキ約千名ヨリナル一乃至數箇ノ大隊ヲ作り、ソレヲ合セテ州防衛ノ一部隊ヲ編成スルコトデアッタ。日本降服ノ時ニ此ノ目的ハ達セラレタ。州ノ防衛ニ於ケル義勇軍ノ任務ハ主トシテ道路ノ交叉點、橋梁、及ビ他ノ戰略上重要ナル地點ノ防衛デアッタ。武器ハ、是等義勇兵ニ對シテハ訓練ノ期間ダケ支給サレ、教育ハ主トシテ木銃テ行ハレタ。

別班、即チ日本第十六軍司令部ノ特別班ハ諜報機關デアッタガ、訓練ノ任ヲ負フト同時ニソレヲ「スパイ」トシテ使フノハ勿論新志願兵ヲ探偵スルコトニモ利用シタノデアアル。

是ヨリ前、日本軍ハ「インドネシヤ」人ヲ補助部隊トシテ利用シテ居タ。占領直後、多クノ「インドネシヤ」兵ガ或ハ徵募サレ、或ハ「兵補」(補助兵)トシテ勤務スルコトヲ余儀ナクサレタノデアッタ。

Doc 2750

是等ノ部隊ハ日本軍ノ一部ヲ構成スルモノデア
ツテ、日本ノ軍服ガ給與サレテキタ。彼等ハ主ト
シテ軍需品補給ヤ女及ビ一般人抑留者ガ占メテ居
ル收容所ヲ警備スル爲ニ使ハレタ。兵補部隊ハ外
地ニ派遣サレタ。

日本海軍モ同様ニ「インドネシヤ」人ノ兵補部
隊ヲ利用シタ。

義勇軍モ兵補部隊モ日本語ヲ話スコトヲ教ヘラ
レタ。命令ハ日本語テ發セラレ、亦規則ハ日本語
テ書カレタ。彼等ハ日本ノ徽章ヲツケテキタ。訓
練ノ重要點ハ「精神」教育デアツタ。

日本ノ宣傳ノ重要ナ目的ノ一ハ、農産物ノ増産
及ビソノ日本軍政監部ヘノ供出デアツタ。

爪哇島ハ日本占領軍及ビ東洋テ戦ヒツツアツタ日
本軍ノ爲ニ食糧ヲ供給スル必要ガアツタ。其ノ上
日本占領軍ハ多量ノ食糧ヲ貯藏シテ居タ。戰前ニ
ハ島民自身ノ主要食糧ノ需要ヲ辛ジテ滿タシテ來
タ爪哇ハ増産ヲ期待サレタ。此ノ増産ハ收奪サレ
タ和蘭ノ専門家ニ代ツテ十分ナ訓練ヲ經テ居ナイ
日本人ガ引續イダ爲ノ灌漑作業ニ對スル適當ナ監
督ノ排除及ビ氣候ト地理的條件ニ適セザル農産物
ヲ欲シ、之ガ生産ヲ強調セシムル爲メ目的達成ニ
日本軍ガ深ツタ出鱈目ノ方法トニ依リ阻害サレタ。
是等一切ノ事ガ一段ト食用作物ノ作物面積ヲ減少
セシメタ。

普通ノ百姓ニトツテハ其ノ生産物ヲ日本ノ當局
ニ渡スコトガ段々利益テナクナツテ來タ。當初カ
ラ日本人ハ米ノ値段ヲ適當ナ水準ニ安定サセル爲
ニ印政府ノ政策ヲ採用シタ。

日本ノ「ギルダール」軍票ガ購買力ヲ減シタ結果公
定ノ米價ハ間モナク他ノ商品トノ比較ニ於テ其ノ
以前ノ價值ヨリ遙カニ低イモノトナツタ。

百姓ガ米ヲ賣ツタ収益ヲ買フコトヲ常トシタ品物
ハ事實上買ヘナカツタ。

日本當局ハ食料生産品收穫ノ六割ハ之ヲ當局ニ供

出シナケレバナラヌト云フ命令ヲ出シタ。當局ハ
 街道ニ關所ヲ設ケテ勵行サレタ地方別封鎖經濟地
 帶ノ設定ノ如キ米ヤ他ノ食料生産品ノ關取引ヲ取
 締ル爲ノ遠大ナ手段ヲ執ツタ。個人消費ヲ除キ
 共働一製粉所以外テノ米ノ脱穀ハ禁止サレタ。
 宣傳部ハ一層多クノ產物ヲ待ンガ爲、一層廣イ地
 域ヲ耕作スルヤウ農夫ヲ説キ込ム爲其ノ全力ヲ注
 イダ。宣傳部ハ又住民ニ其ノ農作物ヲ日本軍政監
 部ニ渡スコトノ説得ニ努力シタ。

爪哇ノミナラズ全南方地域ヲ通ジテ、日本ハ到
 ル處ニ於テ軍事要塞、飛行場、取捨鐵道等ノ構築ノ
 爲勞力ヲ使用シタ。

爪哇ハ新カル勞力ノ供源地デアツタ。當初ヨリ日
 本ノ宣傳ハ、之等苦力ノ自發的應募ノ獎勵ニ大重
 トナツタデアツタ。日本側ハ最初之ニ成功シタ。
 之等ノ苦力ガ日本軍ニ何ノヤウニ扱ハレテキルカ
 ヲ人民ガ知ルヤ彼等ノ爲ニ働カントスル欲求ハ全
 ク消エテシマツタ。之ハ爪哇ヨリ外地へ送ラレタ
 苦力ガ歸ラズ爾後彼等ヨリ何等ノ便リモナキニ及
 ンテ更ニ惡化シタデアツタ。

日本軍ハ其ノ後徵集制ヲ採用シ之ニヨツテ各行
 政區ハ爪哇内ノ仕事並ニ其ノ島以外ノ地ノ勞働ノ
 爲ニ何名ノ苦力ヲ徵發スベキカヲ通告サレタノデ
 アツタ。

一九四三年（昭和十八年）ニ宣傳部ハ活潑ナ運動ヲ開始シタ。コノ運動デ「ブラヂユリット・エコノミ」（經濟界ノ勇者）ハ、日本軍ノ爲ニ働クコトニ依ツテ神聖ナ仕事ヲ果シテキルモノデアルトサレタ。苦力ト謂フ語ヲ口ニスルコトモ最早許サレナカッタ。苦力モ亦軍人デアリ、ソシテ戦争努力ニ對スル其ノ貢獻ハ大イニ賞讃サレネバナラナカッタ。苦力ノ徵集ハ凡ユル手段ヲ盡シテナサレタ。其一ツトシテ後ニ殘サレタ親戚ノ家ニハ「ブラユリット・ベカーヤ」ト記サレタ標札ガ與ヘラレ、公衆ニ此ノ様ナ家ト其居住者ニハ敬意ヲ拂ハネバナラナイト指示サレ、一方又此ノ標札ハ爾後特別ノ保護ガ與ヘラレルコトヲ保證スルト言ハレタノデアル。尙是等ノ親戚達ハ理窟上ハ衣類ノ様ナ乏シイ日用品ノ配給ニハ或特權一總テノ政府官吏ガ彼等ノ分前ヲ受ケ終ツタ後ニシカ持テナカツタ特權一ヲ有シタ。

是等勞働者ノ面倒ヲ見テ貰フ事ハ倅虜ヤ抑留者ノソレヨリモ薄ク、且ツ彼等ガ衛生上ノ豫防策ヤ醫療ニ無智デアツタノテ其ノ事情ヲ更ニ惡化サセタノデアツタ。勞務者トシテ爪哇カラ外ニ移送サレタ者ノ正確ナ數字ハ判ラナイガ降服後日本人ノ公式推算ニハ二十七萬人ト言フ數字ヲ表示シ、戦争終結以來復歸シタモノハ七萬人ニ達シナカツタ。

64.

Doc 2750

歸還者ノ大部分ハ殘忍ナ虐待ヲ受ケテキタノデア
ツタ。宿泊設備、食糧醫療手當ハ全ク不充分デア
ツタバカリテナク又多クノ場合皆無デアツタ。
或ル期間中「勞務者」デ餓死シタリ傳染性疾患デ
死亡シタモノガ毎日或ル收容所カラハ馬車デ運ブ
程多數ニ搬ビ去ラレタ。

宗教問題ニ關シ、宣傳部ハ民衆ノ完全ナル協力ヲ得ントシテ努力シタノデアアル。

是等活動ハ特ニ、民衆ノ大多數ヲ形成スル回教徒ノ感化ニ向ケラレタガ、他ノ回教徒間ニ於ケル宣傳ハ遙カニ重要ノ度ガ低イモノデアッタ。「敵國人」信侶若シクハ傳道者ハ「敵國人」以外ニ對シテハオ勤メヲ行フコトヲ禁ジラレテキタ。「敵國人」信侶若シクハ傳道者ガ教會ノ會衆中ニ「インドネシヤ」人ヲ認メル時ハ、責任ヲ以テ嚴罰ニ處シテ立退カセルコトニナツテキタ。

當初カラ日本人ハ、日本人ノ諳目的ヲ民衆ニ傳へ又自發的協力ニ依リ最大限ノ戰爭努力ヲサセル爲、回教徒ノ爲ニ一ツノ機關ヲ設立スル事ニ努力シタノデアアル。

此ノ方面ニ於ケル日本人ノ幾ツカノ企圖ハ、最初ハ回教徒仲間ノ宗教上ノ主義ニ關スル不一致ノ爲ニ、失敗ニ歸シタノデアアル。一九四三年ノ昭和十八年ノ十一月ニ、日本人ハ回教徒諸団体ヲ一ツノ親機關「マシユミ」(マヂエリス・シユラ・ムスリミン・インドネシヤ)インドネシヤ回教徒協議會ノ略語)ニ統合スルコトニ成功シタノデアアル。

此ノ事ハ回教徒智識階級ヲ同格ニシタ。更ニ又非常ニ多數ノ「ウラマ」(回教經典ノ唱道者)及「キア

イ」(宗教問題ノ教師)ガ居テ、之等ハ同教徒智識階級トハ緊密ニ結びツイテハ居ナカツタガ、村落ニ於テハ相當ノ勢力ヲ振ツテキタ。

頭初ヨリ、宗教部ハ是等「キアイ」及「ウラマ」ヲ通ジテ住民ノ間ニ勢力ヲ得ントシタ。一九四二年ノ昭和十七年ノ七月ニ遡ツテノ話デアアルガ、當時ノ日本人宗教部長ハ爪哇附近ヲ旅行シ始メ、各州ニ於テ地方行政部ニヨリ各所ニ出席スル様ニ命ゼラレタ約五百乃至六百「キアイ」及「ウラマ」ノ爲ニ會ヲ催シタ。部長ハ相變ラズノ調子テ日本ノ見解、意圖ヲ開陳シタ後、聽衆ノ意見ヲ打診シタ。彼ハ「アラビア」名ト日本名ヲ混ゼタ「ハデ」ノ稱名ヲ持ツタ「アラビヤ」ノ衣裳ヲ着ケタ五人ノ日本人ノ援助ヲ受ケテ居タ。此ノ旅行ニ次イデ、一九四二年ノ昭和十七年ノ十二月七日「バタビヤ」ニ於テ、全行政區カラ集マツタ宗教ニ關スル有ラユル學者及教師ノ代表者ノ大會ガ催サレタ。軍政監ハ演說ヲ行ヒ、爪哇ニ於ケル同教徒ニ關スル日本ノ政策ヲ説明シタ。

此ノ政策ハ、三ツノ原則ヲ具体化シテキタ。第一ニ日本軍ハ同教ノ保護者デアリ、且「マホメツト」教ハ尊重サレルト聲明シタ。

第二ノ點ハ、軍政監ハ宗教團體ガ間モ無クソノ活動ヲ行フ事ヲ許サレルデアラウシ又彼等ガ大東亞ノ

67.

Doc 2750

理想ヤ軍政監部ノ支援ヲ宣傳スル尊イ使命ヲ有シテ
キルコトヲ聲明シタ。

第三ノ點ハ、軍政監ハ教育ニ關スル同敎社會ノ協
力ハソレガ日本軍ヘノ全幅的支持ニ向ケラレ且又大
東亞共榮圈ノ理想ヲ鼓吹スルモノニ限り許容サレル
旨ヲ言明シタ。斯ノ如キ制限ヲ加ヘラレテ、宗敎教
育ハ許可サレ又書籍其ノ他ノ便宜ヲ以テ公式ニ支援
サレルコトトナツタ。

宗務部ハ「バタビア」ニ常設ノ訓練本部ヲ設立シ、此處デハ「キアイ」及ビ「ウラマ」各六十人ノ団体ニ對シ、三ヶ月間ニ亘ル日本の理念ニ關スル課程ガ與ヘラレタ。

是等ノ課程ハ又、日本ノ宣傳ガ效果的デアツタカ否カラ試験スル爲ニ用ヒラレタノデアリ、又ソレガ適當ナ共同者ヲ選擇スルノ便ヲ與ヘタノデアル。

是等ノ共力者ガ單純ナ農民ニ對シ宣傳ヲ行ツタ、ソシテ彼等ハ充分ニ米ヲ生産シ供出セシメルコト、充分ニ勞働者ヲ供給スルコト、並ニ「志願兵」ヤ兵補ニ徵募スル責任ヲ負ツテキタ。日本人ハ同教徒ノ迷信ニ働キカケル古イ策略ヲ採用シ、「キアイ」ヤ「ウラマ」ニ大東亞戰爭ハ「カフイヤ」不信者ニ對抗スル「サビル」(聖ナル)戰デアルト宣言スルヤウ説伏セント努メタ。日本人自身ガ不信仰者デアルト云フ點ガ擧ゲラレルト「共通祖先」
「共通民族」及ビ日本人並ニ「インドネシア」人ニ共通ナル運命等ガ指摘サレタ。

一九四四年(昭和十九年)ノ初、宗教上ノ騒亂ガ「インドラマユ」地方及ビ「カルト」ニ起ツタ。日本軍ハ宗務部ノ「インドネシア」人指導者ニ責任ヲ負ハセ、彼ハ爪哇ノ最年長者デ最モ人氣ノア

ル「キアイ」ノ一人ト交代サセラレタ。彼ハコノ
 職ヲ受諾シ「バタビヤ」ニ一日滞在シタガ直ニ自
 分ノ宗教団体ニ歸リ、宗務部ノ指導ハ日本人課長
 等ニ委セタ。

一九四三年（昭和十八年）十一月以來「マシユ
 ミ」ハ日本軍當局ガ同教徒ノ智識階級ヲ支配スル
 団体トナリ、ソレヲ通ジテ日本の理想ノ宣傳ヲ行
 ツタリ、輿論ヲ打診シタリ、諜報活動ヲ行ツタ。

「マシユミ」ト宗務部トノ關係ハ絶エズ強化サ
 レ、遂ニ「マシユミ」ハ全テノ目的ニ關シ宗務部
 ノ指揮ヲ受ケルニ至ツタ。

コノ外ニ、日本軍ハ地方的ニ著名ナ「キアイ」
 ノ下ニ、各州ニ宗務課ヲ設ケタ。彼等ハ軍政政策
 ヲ村ニ了解サセル義務ヲ持ツテキタ。是等ノ機關
 ハ次第ニ地方ノ「キアイ」ノ管理下ニアル最小ノ
 地方地區ニ迄擴張サレタ。

馬來語、爪哇語「スンダ」語ヲ編輯シ、正統派
 ノ「キアイ」送ガ讀ミ得ル唯一ノ文字「アラブ」
 文字ヲ印刷シタ「アシユラー」ト云フ出版物ヲ宗
 務部ハ發行シタ。コノ刊行物ハ爪哇ノ全「キアイ」
 ニ無料ヲ配布サレタ。

日本軍ハ又數ニ於テハ比較的少カツタガ、中産
 階級ノ中江テアツタ中口人ヲ共働セシムルコトニ

幾度カ努力シタ。日本軍ハ初メ、多クノ中口人口
 体（一九四二年（昭和十七年）三月一切解体サル）
 ノ主腦部迄ヲ誘ツテ一大機關ヲ形成セシメントシ
 タガソノ努力ハ完全ナル失敗ニ歸シタノデアアル。
 日本軍ハ一九四三年（昭和十八年）八月、少數
 ノ著名ナ南京派中口人ノ支持ノ下ニ「華僑總會」
 ヲ設立スルニ決シタ。

「華僑總會」ハ常套的方針ニ則リ組織サレ、日
 本軍當局ニ依リ任命サレタ首腦部ヲ載キノノ主要
 目的ハ日本軍政監部トノ緊密ナル協力デアツタ。
 如何ナル行動モ彼等自身ノ創意カラ執ラレタキノ
 ハナク、本國體ハ日本ノ宣傳ヲ普及スル爲ニ或ハ諜報機關トシ
 テ用ヒラレタ。
 同時期ニ日本軍ハ制限サレタ範圍内ニ於ケル中
 國人ノ私立學校教育ノ許可並ニ中口ニ於ケル日本
 軍占領地區ニ在ル家族ヘノ少額送金ノ許可ト云フ
 様ナ或ル讓歩ヲシタガコノ後ノ方ノ許可ハ守ラレ
 ナカツタ。

主トシテ技術的及ビ行政方面ノ業務ノ中堅ヲ占
 メテキタ歐亞混血人ハ最初ハ放逐サレ、日本人ガ
 高い地位ニ於テハ彼等ト交代シタガ、ヨリ多クノ
 中間的地位ニ就クニハ十分デナカツタ、又訓練サ
 レタ「インドネシヤ」人ハソノ數ニ於テ不充分デ
 アツタノデアアル。

歐亞混血人種ノ協力ヲ確保セントスル最初ノ努
力ハ、一九四三年ノ昭和十八年ノ九月ニ爲サレタ。
「英國人」ト看做サレテ居タ歐亞混血人ハ次第ニ
「インドネシア」人種ノ次ニ位スル土着住民ニ屬
スルモノトシテ取扱ハレル様ニナツタ。然シ日本
人ハ歐亞混血人ニ對シテ今後ハ日本指導下ニ大東
亞社會ノ一員トシテノ感情ヲ持チ且行動セネバナ
ラヌコトヲ自覺シ又西洋人ノ祖先ヲ拋棄セネバナ
ラヌコトヲ規定シタ。

日本人ハ、歐亞混血人ニ今迄ハ「インドネシア」
人子弟ニノミ充テラレテ居タ村ノ學校へ彼等ノ子
弟數名ヲ入學サセルコトヲ約束シタ。歐亞混血人
子弟ノ爲ノ別個ノ學校ハ禁止サレタ儘デアツタ。
一九四四年ノ昭和十九年ノ始メ日本人ハ「ブ
テラ」ヲ解散シ、之ニ代フルニ聖戰究極ノ勝利ヲ
達成スル爲ニ全亞細亞人ガ努力ヲ結集スル一ツノ
機構ヲ以テスルニ決シタノデアアル。

日本人ノ意見ニ依レバ「ブテラ」ハ單純ナ村民
ニ手ヲ伸バスコトニ失敗シタノデアツタ。而シテ
此等農民ハ爪哇總人口ノ八割ヲ占メテ居リ、置及
勞役ノ爲ノ勞働力竝ニ日本人ノ爲ノ食用作物ノ生

産ヲ供給シテ居タモノナノデアアル。此ノ運動ハ餘
 リニ強ク國家主義的ナモノニナツタ。新シイ機構
 ハ日本デ用キラレタ手本ニ則リ、宣傳機構ヲ必需
 品ノ配給機構ト結合シタノデアツタ。一九四四年
 ノ昭和十九年ノ一月カラ始メテ、爪哇全島ガ各
 ヲ約二十戸ヨリ成ル隣組ト呼バレル小部落ニ分割
 サレタ。是等隣組ハ中央集權的方針デ組織サレタ。
 組長ヲ頭トシ、組長ハ上カラ任命サレ、與ヘラレ
 タ命令ノ實行ニ付キ責任ヲ負ツテ居タノデアアル。
 社交、火災豫防、農業等現存ノ總テノ團體ハ隣組
 ニ吸収サレタ。

此ノ制度ノ任務ハ非常ニ廣汎ニ互ルモノデアツ
 タ。配給ノコト許リデナク、防空及「ゲリラ」戰
 ノ正規ノ訓練モ亦ソノ責務デアツタ。ノミナラズ
 隣組長ハ隣組ノ人々ニ一週少クトモ一回ハ日本ノ
 「イデオロギー」ヤ其ノ實際適用ニ就イテ講義ヲ
 セネバナラナカツタ。此等ノ集會デ住民ニ歸スル
 日本ノ目的ハ、日本宣傳部ノ指令ニ基イテ賞揚サ
 レタ。之ハ大抵ハ内幕ニキタ日本人ニ特別ニ訓練
 サレタ「インドネシア」人ニ依ツテ爲サレタ。

他ノ集會ハ一層大キナ單位（字ト稱シタ。一村
 ハ二又ハ三ノ字ニ分割サレタ。）デ月一回僅サレ

タ。各家庭ノ一人ハ此等ノ集會ニ出席セネバナリ
ナカツタ。

抑留サレテ居ナイ歐亞混血人ヲ含ム一隣組地域
ノ全住民ハ、此ノ機帯ノ組合員タルコトヲ要シタ。
組合員タルコトダケガ配給ノ便宜ヲ與ヘタ。

一九四四年ノ昭和十九年ノ三月九日、隣組ガ満
足ナ活動状態ニ在ツタ時「ブテラ」ハ公式ニ解散
サレ、總テノ亞細亞人團體ヲ包含スル「爪哇奉公
會」ガ公式ニ設立サレタ。此ノ團體ハ一九四五年
ノ昭和二十年ノ八月三十一日ニ解散サレル迄日本
人支配ノ道具トシテ存続シタ。

爪哇奉公會設立ニ關スル政令（一九四四年ノ昭
和十九年ノ一月八日）ニ附隨シタ公式説明ニ依レ
バ同會ハ全住民トノ「友誼的協力」ノ雰囲気ノ中
ニ軍政監部ノ訓令ヲ實行スル爲ニ軍政監部ノ一機
關トシテ設立セラレタモノデアツタ。此等ノ訓令
ガ全住民ニ行キ渡ル様ニ面倒ヲミルノガ此ノ機帯
ノ任務デアリ、且其ハ隣組ト密接ナ聯繫ノ下ニ働
クモノトナツテ居タ。其ノ指導者達ハ、誰モガ軍
政監部ノ積極的支持ニ參加シテ居ルカドウカヲ見
ル責任ガアツタ。此ノ説明ニ依レバ、爪哇奉公會

Doc 2750

ハ、事實、全住民ノ完全ナ同位化ノ原則ニ基ク行
政機關デアリ、從ツテ民衆全體ノ機構デアツタ。
爪哇奉公會ノ中央主腦部ハ軍司令官ニ依ツテ任
命サレ、日本人ノミデ構成サレテ居タ。中央主腦
部ノ監督下ニ在ル行政局ニハ數名ノ「インドネシ
ア」人ガ居タ。支部ハ各地方ニ設置サレタ。最小
ノ單位デアル區奉公會ハ一ツ又ハ一ツ以上ノ字ノ
アザノヲ監督シ字ハ又數組ノ隣組ヲ監督シタ。
此等地方奉公會會長ハ地方行政部ノ部長デアリ
此ノ地方行政部ハ部長ノ任命シタ會議ニ依ツテ輔
佐サレテ居タ。會議ハ少クトモ六ヶ月ニ一同、軍
政府ニ對スル援助ヲ促進スル方法手段ヲ討議スル
必要ガ生ジタ時ニ開催スルコトニナツテ居タ。

74.

隣組ハ爪哇奉公會ノ末端組織ヲ成シテ居リ、其ノ職務ハ次ノ如クデアツタ。

イ、祖國防衛ノ爲、及ビ空襲時ニ敵落下傘部隊、敵間諜、天災、火災及ビ犯罪ニ對シテ警察及ビ警防團ヘノ積極的援助。

ロ、住民ヲシテ軍政監部ノ法令、規則等ノ目的ヲ理解セシメルコト。

ハ、食糧増産ノ促進、是等食糧生産物ノ當局ヘノ供出ノ奨励及日用必需物資ノ配給。

ニ、軍政監部ヘノ一般的援助、例ヘバ、兵補部隊員、及離村セル志願兵並ニ勞務者（苦力）ノ家族ヲ保護スル事。

ホ、相互扶助。

爪哇奉公會ハ日本人ヲモ含ミ國籍ノ如何ヲ問ハズ、同一目的ヲ追求スル一切ノ機關ヲ併呑シタノデアツタ。婦人會、「マレユミ」（同教徒團體）華僑總會、體育會、並ニ前述ノ啓民文化指導社等ハ皆爪哇奉公會ニ合体サレタ。

相互扶助ノ爲ニ歐亞混血人達ニ依ツテ爲サレタ活動ハ、憲兵隊ニ依ル組織的檢舉ヲ惹起シタ。幾十人カノ指導者ハ日本軍ノ占領期間中ニ、虐待、飢餓、傳染病、（充分ナル衛生施設ナクシテ多人

獄中テ死亡シタノデアツタ。或ハ軍法會議ノ判決ニヨリ

如何ナル者モ一度嫌疑ヲ受ケタ者ハ暗ク拷問サレ、爲ニ偽リノ白狀ハ毎日ノ出來事トナリ、此ガ又往々ニシテ新タナル犠牲者ヲ憲兵隊ノ毒牙ニカカラセタノデアツタ。「ボルネオ」ノ西海岸ニアル「ホンチヤナツタ」デ一九四四年ノ昭和十九年ノニ其ノ代表的ナ例ガ起ツタ。其處デハ地方ノ貴族始メ、千二百余名ノ著名ナ「インドネシヤ」人及ビ中國人ガ全然無根據ナ謀叛ノ嫌疑デ處刑サレタ。又爪哇ニ於テモ「インドネシヤ」人ハ絶エズ憲兵ヲ怖レテ居タ。周國到ル處ニ間諜ガ居タノテ話ス時ニハ最大ノ注意ガ拂ハレル必要ガアツタノデアアル。通常、全ク惡氣ノ無イ話ヲシタト云フ報告ニ「水責メ」感電、四肢ヲ縛シテ吊スコト、大蛇使用等極メテ殘酷ナ拷問ニ掛ケラレタ凡ユル人種ノ人達ノ幾百ノ例ガアル。

爪哇以外ニ於テモ政治及ビ宗教活動ニ關シテ同ジ政策ガ墨守サレタ。此處デモ亦、東條ノ約束ノ結果、多數ノ著名ナ協力的「インドネシヤ」人ハ軍政監部ノ職ニ任命サレタ。參議會ト同様ノ團體ガ設ケラレタガ、コノ經過ハ爪哇ヨリ相當後デアツタ。夫レニ海軍ニ依リ統治サレタ諸領土ニ於テ

ハ陸軍占領下ノ地域ヨリモ一層後レタ。海軍地區
 (「セレベス」、「ボルネオ」等)デハ中央參議
 院ガ組織サレル段階ニハ遂ニ到ラナカツタ。然シ
 「スマトラ」ニ於テハ同島ノ中央參議院ガ「フオ
 ート・デ・コック」ニ一九四五年ノ昭和二十年ノ
 二月ニ設ケラレタ。「ブテラ」ニ類似シタ機構ハ
 「インドネシヤ」人知識階級ノ要請ニモ拘ラズ許
 可サレナカツタ。

爪哇ニ比較スルト、其ノ他ノ諸島ニ於テハ宣傳
 ハ青年層ニ一層集中セラレタ。

義勇軍ニ類似シタ「志願兵部隊」ガ設ケラレタ。
 一九四四年ノ昭和十九年中、日本ノ宣傳ノ西
 ツノ基本的目標ハ充分ニ達成サレタ。「亞細亞人
 ノ爲ノ亞細亞」ト云フ標語ヲ用ヒ、宗教的憎惡ヲ激
 ヘテ日本人ハ指導課程ヲ設ケルコトニ依ツテ社會
 ノ各層ニ働きカケタ。最初ニ取り扱ハレタ團體ハ
 學校教師ノ團體デアリ、其ノ後ニ警察官、村長、
 下級文官、高級官吏、醫師、薬剤師、辯護士、各
 官廳ノ職員ガ續イタ。極ク小サイ團體デサヘモ、
 順番ニ注意ヲ向ケラレタ。

此ノ宣傳ハ、如何ニ粗雑デアツタニシテモ一部
 ハ混沌タル状態ト民衆ノ苦ンデ居タ貧窮困難ノ爲

78.

Doc 2750

ニ或ル程度マデ成功シタ。
日本人ハ、此ノ状態ノモタラス危険ノ可能ヲハ
ツキリ認識シテ居タ。日本ノ占領カラ氣ヲ散ラス
ト云フ方法ニ依リ之等ノ感情ヲ何カ他ノ方向ニ向
ケルノガ宣傳部ノ仕事デアツタ。西洋、特ニ合衆
國ト英國トニ對スル絶エズ強化サレル憎惡運動ガ
行ハレ、之等諸國ハ和蘭ト共ニ民衆ノ全苦惱ノ責
任ヲ負ハサレタデアツタ。

IV 第四段階

一九四四年九月—一九四五年八月

爪哇域外ノ戰略的狀勢ハ其ノ間著シク變化シテキ
 タ。「サイパン」ノ突破ハ既ニ起リソウニシテ日本
 ノ防衛ノ基礎ソノモノヲ著シク振撼セシメタ。東條
 内閣ハ小磯内閣ニヨツテ承ケ繼ガレ之ハ南方地域ノ
 孤立及其處ノ日本軍隊ガ自力ニヨツテ立ツコトノ必
 然性ニ直面セザルヲ得ナイコトヲ認メ、ソシテ一般
 協力ヲ得ルコトガ一層重要デアルコトヲ認メタ。
 日本ニ必要トスル住民ノ協力ハ從ツテ益々其ノ重
 要性ヲ増シテ來タ。

東條ノ約束實現ノ方法ガ一九四三年八月ニ知ラレ
 タトキ日本ノ約束ニ尙信賴ヲ寄セテキタ顯要ナ「イ
 ンドネシア」人ノ間ニ絶望ハ寧ロ明白ニ表現セラレ
 タ。此ノ民衆カラノ完全ナ協力ヲ維持セントスルナ
 ラバ南方地域ニ於ケル國民的熱望ヲ満足セシメルヤ
 ウニ促進セネバナラヌトイフコトヲ日本側ハ警告サ
 レタ。

一九四四年九月七日小磯首相ハ帝國議會ニ於テ朝
 鮮及台灣ニ對シテ日本人ニヨツテ享有セラレタ權利
 ト均等ヲ約束シタ後ニ東印度ニ對シテ獨立ノ約束ヲ
 爲シタ。(法廷證書第二七七號)

此ノ演說ニ於テ獨立ガ許容サレタ場合ニ於テ何處
 ノ地域ガ獨立ヲ獲得スルデアラウカトイフコトハ明

確ニセラレナカッタ。獨立ノ約束ハ民衆ガ大東亞共榮圈ノ支持ノ爲彼等ノ固有ノ領土ヲ防衛スルコトヲ條件トシテ與ヘラレタ。此ノ所謂獨立ノ範圍ハ八紘一字思想ノ一ノ適用トシテノ大東亞共榮圈ノ一員タルコトヲ引用スルコトノミニヨツテ説明セラレタ。之ヨリ先一九四四年八月末頃爪哇ニ於ケル第十六軍司令部ハ秘密裡ニ此ノ聲明ノ内容ニ付通報ヲ受ケ而シテ日本側諸機關ニ對シ或ル秘密命令ヲ發令シタ此等ノ命令書（檢察部書類第二七五六號及第二七五七號）ハ日本軍ノ「パタビア」占領期間中軍政監部ニヨツテ使用セラレタ建物ノ中ニ於テ發見セラレタ。

一九四四年九月七日小磯首相ニ依ツテ爲サレタ
約束ハ爪哇デ總司令官ニヨリ次ノ如キ言葉デ發表
サレタ。

「將來建設サレル、國家ニ關シテハ、ソノ國家
ハ、大東亞共榮圈ノ一環トナリ且大日本ノ指
導下ニ大東亞ノ發展ニ貢獻スル義務ヲ有スル
公明正大ニシテ眞實ノ國家デアル。
其故ニ、眞實ノ意味ニ於テ大東亞ノ國家ノ一
トナランガ爲ニ、凡テノ住民ガ、將來建設サ
レル國家ノ水準ヲ高メント欲スルナラバ、最
後ノ勝利ガ得ラレルマデ即チ徹底的ニ大東亞
ノ民ト自覺スル迄大東亞民トナラントシテ絶
エス目ヲ努力スル事ガ非常ニ必要デアル。
最後ノ勝利ガ得ラレヌト假定シテ見ヨ。ソノ
時、大東亞ノ建設ハ實現サレズ當然蘭印諸島
ハソノ獨立ヲ達成シナイデアラウ。
其故ニ、全住民ハ、凡ニル民族間ニ於ケル完
全ナル友好圈内ニテ最後ノ勝利ヲ得ル爲ニ全
力ヲ傾注セネバナラヌ。彼等ハ凡テノ困難ヲ
辛抱シテ耐エネバナラヌ又將來起リ得ベキ凡

テノ障害ヲモ除去シナケレバナラヌ。
 其故ニ、カノ光榮アル獨立ノ時機ノ到來ヲ待
 ツト同時ニ、全住民ハコノ戰爭ノ繼續ノタメ
 ニ奮勵努力シナケレバナラヌ。斯カル態度ヲ
 以テコソ、將來ニ對スル義務ハ遂行サレ得ル
 ノデアル。」

小磯ノ約束ニ對スル、インドネシア人ノ「感謝」
 ガ依然論旨デアリソレニ就テ、日本ノ宣傳ハ此先
 數ヶ月間ニ亘リ實施續ケラレタ。

同時ニ、第十六軍司令部ハ、如何ナル地域ガ「
 獨立」ト宣言サルベキカ、是ガ起ル日附及ビ新政
 府竝ニ國家ノ形體ニ關シテ、陸軍省ニ意見ヲ具申
 スベク指令サレタ。爪哇ノ軍政府ハソノ返答ニ「
 獨立指導方策要綱」ト云フ報告ヲ提出シ、ソノ中
 デ爪哇ヲ最初ニ獨立トスベシト提案シタ。國民意
 識ヲ強化スル爲ニ提議サレタ施策ハ建國學院ノ建
 設（國家ヲ建設スル爲メノ學院）及ビ「行政參加
 」ノ増大デアッタ。

小磯ノ約束ヲ遂行スルニハ先ツ僅カニ二ツノ實
 質的手段ガ講ゼラレタ。一九四四年九月八日以後

住民ハ場所ト大サニハ嚴重ナ規則ガアツタケレドモ或ル特定ノ休日ニノミ日本ノ國旗ト、インドネシアノ國旗ヲ相竝ベテ掲ゲルコトヲ許可サレタ。政府ノ官廳ノ建物ニハ日本國旗ノミガ掲揚サレルコト、ナツテキタ。同日附テ國歌トシテ「インドネシア、ラヤ」ノ歌（大インドネシアノ歌）ヲ許可ガ與ヘラレタ。

一九四四年九月十一日總司令官ハ將來ノ獨立ニ對スル約束ノ深甚ナル感謝ノ念ヲ、インドネシア人ガ如何ニシテ日本及ビ日本軍ニ表ハスカ又米英打倒ヲ招來センガ爲ニ如何ニ人民ノ意志ヲ更ニ昂揚シ得ルカラ回答スル爲ニ中央參議院ノ特別會議ヲ招集シタ。

一九四四年十一月十七日更ニ中央參議院ノ臨時會議ガ舉行サレ、インドネシア住民ニ對スル「指針」トシテ所謂「パンテヤ・ダールマ」（處世五則）ヲ規定スル動議ガ採用サレタ。

コノ「パンテヤ・ダールマ」ニハ次ノ如ク書イテアル。

「インドネシアノ住民ニ對シ、即チ

一、我々ハ、大東亞ノ他ノ諸民族ト共ニ、コノ戦争ニ於テ大日本ト生死ヲ共ニシ且ツ今次戦争ガ正義ト公正ノタメニ起ツタモノデア
ルガ故ニ、衷心ヨリ我々ノ努力ヲ獻ゲン。

二、我々ハ、獨立シ統一アリ、主權ヲ有シ公正ニシテ繁榮シ且ツ大日本ノ精神的功績ヲ常ニ尊ビ大東亞ノ友邦ノ眞ノ一員トシテ生キントスル、イドネシア國ヲ建設ス。

三、我々ハ、我々自身ノ文明ト文化ヲ維持向上スル事ニヨリ、アジアノ文化ノ發展ニ盡力スル事ニヨリ世界ノ文化ヲ美化スル事ニヨ
ツテ光榮アル偉大サヲ得ンガ爲ニ衷心ヨリ
努力セン。

四、大東亞諸民族ト緊密不變ノ友邦關係ヲ維持スルト共ニ、我々ハ全靈ト不動ノ精神ヲ以テ、全能ノ神ヲ常ニ信ジ、我々ノ國家ト人
民ニ奉任ス

五、確固燃ユルガ如キ願望ヲ以テ、八紘一字ノ原則ニヨリ全人類ヲ一家トナス觀念ニ基キ

恒久世界平和ノ達成ノタメニ我々ハ努力スル
 一九四四年十二月一日行政ヘノ參與ハ敷州
 ニ於ケル、インドネシア人「副州長官」又
 更ニ數人ノ、インドネシア人ノ參與ガ軍政
 監部ノ各省ニ任命サレル事ニ及ボサレタ。
 中央參議院ガ開カレナイ期間中軍政監部ニ
 意見具申スル爲ニ定期的ニ會スル參與會議
 ガ設立サレタ。

其間宣傳班ハ「ベントング・ベルワンガン・
 ジャワ」(爪哇ヲ一ツノ要塞)ノ爲ニ新シイ標語
 ヲ掲ゲタ。今ヤ公然ト豫想セラレル聯合軍上陸ノ
 恐レアルニ鑑ミテ住民ヲ驅ツテ最高ノ戰爭努力ニ
 奉仕サセルコトガソノ目的デアツタ。防空ト消防
 ノ訓練ハ毎日ノ日課デアリ、其他住民ハ有力ナ宣
 傳機關ニ依ツテ影響セラレ「ゲリラ」戰ノ訓練ヲ
 受ケタ。原始的武器(火ニヨツテ硬クサレタ^{竹槍})密
 集戰鬪トヲ以テ敵ノ小數部隊ヲ擊破スル方法ヲ彼
 等ハ教ヘラレタ。

「バタビヤ」ニ於ケル宣傳集會ニ於テ「ローズベ
 ルト」、「チアーチル」及「バン・ダー・ブラス」
 (著名ナ和蘭行政官)ノ人像ガ全町ヲ行進サセラ
 レタ後燒カレタ。米國、英國及和蘭ノ國旗ガ「ベ

ンキレテ路上ニ拙カレ、宣傳示威行進中行列ニ依
ツテ蹂躪サレタ。宗教的宣傳ハ回教徒ノ西洋諸國
ニ對スル神聖戰爭ヲ宣言スルヤウ驕リ立テタ。

此ノ期間ニ三ツノ新シイ半軍事的團體ガ組織サ
レ、村落防衛ニ、警防團ノ援軍トシテ隣組ガ最後
ニ使用サレタ。戰時ニ於ケル彼等ノ働ノ斯カル行
動ガ陸戦法規ノ背反ヲ構成シ、對抗軍ハ已ムナク
彼等ヲ「佛國狙撃兵」トシテ取り扱ハサルヲ得ナ
イト云フ事ヲ如何ナル場合ニモ是等單純ナル部落
民ニ話サレタコトハナカツタ。

コノ訓練ハ豫期セザル結果ヲモタラシタ。一九
四五年二月ノ或夜「ブリター」(東爪哇)ニ於ケ
ル義勇防衛隊ノ一分隊ガ兵器庫警備ノ日本軍ヲ奇
襲シテ、兵器ト共ニ憲兵隊本部、電信、電話局等
ノ町ノ主要點ヲ占領シタ。從ツテ殺人及強盜ノ大
騷ギガ續イテ起ツタガ被害者ハ皆日本人ヲ含ム非
「インドネシア」人デアツタ。次ノ數日中ニ其ノ
運動ハ或ハ妥協ニ依リ解決サレ、或ハ暴力ト流血
ニ依リ鎮壓サレタ。

更ニ經濟的分野ニ於ケル日本側ノ規制殊ニ農産物ノ供出及原住民ノ勞務ニ對スル反抗ノ増加ガアツタ。此ノ反抗ニ打克ツ爲メニ徵募ノ貧弱ナ成績ニ責任ヲ負ハサレタ所ノ「インドネシア」人文官ニ對シテ強力ナ措置ガ執ラレタ。多數ノ者が免職セラレ國家主義者及時ニハ回教徒ノ政治家ニヨツテ交替セラレタ。此等ノ新シイ官吏ハ瓜哇奉公會ヲ通ジテ或ハ宗教的針路ヲ通シテ頭ニ立ツ様ニナツタ。「インドネシア」行政團體ニ於テノ新入者ハ完全ナ適任者テハナカツタ。ソウシテ彼等ニハ常ニ日本人ノ顧問ガアツタ。此ノ團體ノ約三分ノ一ハ日本側ニ好感ヲ有スル國家主義者達ヲ以テ職員ト爲シテキタ。必要トセラレタ食糧ノ供出及苦力並ニ義勇隊員ノ徵募ハ多數ノ縣ニヨツテ達成スルコトガ出來ナカツタ。日本側ハ住民ノ協力ニ依存スルコトガ増大シタコト及彼等自身ノ宣傳ノ結果ヲ甘受シナケレバナラナクナツタコトヲ認メタ。

既ニ一九四二年九月、時ノ瓜哇方面最高指揮官顧問兒玉秀雄伯爵ハ東京ヲ訪問シテ東印度ニ關スル現地ノ意嚮ニ興味ヲ喚起スベク試ミタ。一九四三年十一月ニハ「スカルノ」ハ日本へ派遣サレ東條首相ニ獨立ヲ強ク要請シタガ何等確答ヲ得ルコトガ出來ナ

カッタ。一九四四年ノ末頃時ノ瓜哇軍政府最高民間
顧問林ハ瓜哇方面最高指揮官ノ承認ヲ得テ日本ノ東
印度僑民獨立ノ支持ヲ懇懇スベク東京ヲ訪問シタ。

一九四五年四月二十九日連國學院（國家建設ノ爲
メノ學校）ガ設立サレタ。其ノ目的ハ「獨立」國家
ノ將來ノ「指導者」ノ思想ニ影響ヲ與ヘ且ツ又日本ニ
ヨツテ指導サレル大東亞共榮圈ノ理想及此ノ指導者
トシテノ正確ナ理念ヲ彼等ノ頭ニ浸込マセルコトテ
アッタ。

其ノ間瓜哇司令部ハ急速ナ解決ヲ圖ルベク最高當
局ニ迫ツタ。

一九四五年四月三十日會議ガ「シンガポール」ニ於
テ開催サレ瓜哇及「スマトラ」ヲ含ム板垣ニヨツテ
統率セラレタ第七方面軍ノ指揮下ニ在ル總テノ地域
ノ總務部長ガ出席シタ。此ノ會議ニ於テ瓜哇ノ總務
部長ハ現在ノ「インドネシア」人ノ國民意識ガ如何
ナル程度迄充分覺醒セラレテ平ルカヲ説明シ且ツ獨
立ノ約束ヲ實行スル外ニ住民ノ信頼ヲ回復スルノ道
ノナイ事實ヲ強調シタ。

一九四五年五月十五日西貢ニ於ケル寺内元帥ノ司
令部ハ「獨立」ニ關スル現地司令部ノ見解ヲ求メタ。
瓜哇ハ一年以内ニ隨領東印度全部ニ對シ獨立ヲ宣言
スベキ提議ヲ以テ速ニ回答ヲ寄セタ。

「シンガポール」ハ其ノ問題ヲ避ケ獨立ヲ開始スル時機ニ非ズトイフタ。

其ノ後一九四五年五月二十日叔垣ノ煽動ニヨツテ「シンガポール」ニ於テ全參謀長會議ガ開催セラレタ。其ノ會議ハ戦争ガ日本ニ不利ニナリツ、アルコトヲ認メタ。

瓜哇ハ「獨立調査準備委員」(獨立ノ爲メノ準備ヲ研究スル會)ヲ招集スルコトヲ許サレタ。此ノ委員會ハ一九四五年五月二十八日設置セラレ日本ト共ニ生き共ニ死スル忠誠ヲ嚴肅ニ宣誓シタ。

「海軍」地域(ボルネオ、セレベス、レッツサー、スンダ)列島等)ハ此ノ會議ニ代表サレテハキナカツタ。ソウシテ論議サレタ措置ハ單ニ「陸軍」地域ノミニ係ハリソレハヤガテ瓜哇ニ局限サレタ。「スマトラ」ニ於テハ政治的發展ハ瓜哇ヨリモ遅レタ。ソウシテ一九四五年二月ニ至ル迄「スマトラ」ニ對シテ中央參議員ハ設立サレナカツタ。

獨立ノ爲メノ準備ヲ研究スル會ハ約六十名ノ委員ニヨリ構成サレタ。即チ四名ノ中國人、一名ノ印度「アラビア」人及一名ノ歐亞人ヲ含ンデキタ。

日本人ガ其ノ委員長代理デアリ他ニ七名ノ「特別委員」ガアツタ。ソノ委員會ハ日本人ヲ部長代理トスル行政部ヲ有シテキタ。

此ノ委員會ノ根底ヲ爲ス法令ハ委員會ノ決定ハ憲
政監ニ報告セラルベキコトヲ規定シタ。後ニ新ラシ
イ「獨立準備ノ爲メノ會」ガ組織サレルコトニナツ
タ。一「研究ノ爲メノ委員會」ニハ研究ニ局限シ如何ナ
ル決定ヲモナス權限ヲ附與シナイコトガ明瞭ニ規定
サレテキタ。

委員會ハ一九四五年五月二十九日カラ六月二日迄
及同年七月十日カラ十六日迄ノ二回開催サレタ。

此等ノ會合ハ一般ニ公開サレナカツタ。就中「フイ
リツピン」傀儡國家ノ憲法ニ類似シタモノガ起草サ
レタ。

委員會ガ決定ヲ爲ス何等ノ權限モナク又瓜哇自体
ニ局限サレナケレバナラナイトイフコトガ知ラサレ
タトキ失望ガ起キタ。

一九四五年七月十七日最高指導會議ハ出來ル限
 リ速ニ東印度ニ「獨立」ヲ許容スル政策ヲ採用ス
 ルコトニ決定シタ（檢察側書類第二七五九號法廷
 書證第 號）此ノ決定ハ一九四五年七月二十一
 日爪哇ニ到着シタ。東京カラノ指令ニ依レバ新國
 家ノ領土ハ蘭領東印度ノ全部ヲ包含スルモノトシ
 他方近キ將來ニ獨立準備委員會ガ設置サレルコト
 ニナツテキタ。

重點ハ軍作戦ノ要求ヲ保護セントスル必要性ニ
 置カレタ。傀儡國家ノ樹立ハ一九四六年中頃迄ハ
 行フベキニアラズ又上記委員會ハ早クトモ一九四
 五年末頃ニ設置サルベキデアルト一九四五年六月
 ニ提言シタ在西亞南方軍總司令部ガ其ノ細目決定
 ヲ命ゼラレタ。

從ツテ一九四五年七月三十日「シンガポール」
 ニ在ル板垣ノ司令部デハ現地總務部長（軍政監部
 ノ各總務部長）ノ會議が開カレタ。此ノ會議ニ於
 テハ所謂「獨立」ノ準備ヲ指導スル爲メノ計劃ガ
 立テラレタ。ソレニヨレバ期日ハ一九四六年ノ春
 ト定メラレタ。

V. 第五段階 一九四五年八月、九月

一九四五年八月ノ始メ、寺內元帥ハ「インドネシ
 ア」傀儡國家設置ノ準備ヲ出來ル限リ急ギ此ノ國

家ヲ一九四五年九月ニ創設スベシト云フ電信命令
ヲ東京カラ受ケ取ツタ。

此ノ命令ノ履行ニ付、一九四五年八月七日寺内ハ
獨立準備委員會ノ制定ヲ布告シタ。

(獨立準備ノタメノ委員會)

此ノ創設ハ布告當日爲サレ次ノ如クデアル

南方軍ノ布告

「インドネシア」獨立準備委員會ニ關スル件

「昨年九月七日ノ日本政府ノ宣言ニ基キ南方軍ハ
終始一貫「インドネシア」人ヲ指導スル處置ヲ
取り來ツタ。現今ニ至ル民衆ノ精神的覺醒ニ因
リ彼等ハ燃ユルガ如キ熱狂ヲ以テソノ政治竝ビ
ニ國防ノ訓令ニ迅速ナル進歩ヲ成シ多クヲ凡ユ
ル面ニ迷グルニ成功シタ。

「民衆ノ活動及ビ一意専心ノ努力ニ應ジ南方軍ハ
八月中旬「インドネシア」獨立準備委員會ノ設
置ニ贊意ヲ表明スル。該委員會ハ獨立「インド
ネシア」政府設置ノ爲メノ最終的準備ニ關スル
凡ユル手段ヲ促進スル。

一九四五年八月七日十二時」

寺内元帥ノ布告ガ爪哇ニ於テ發表セラレタト同日
ニ爪哇方面最高指揮官モ亦布告ヲ發シタガ、此ノ
中ニハ就中次ノ如ク述べラレテキタ。

「獨立國家タラントスル願望ハ今ヤ頂點ニ達シ全インドネシア」中ニ燃エ上リツツアル。大日本帝國ハソノ根本原理即チ八紘一字ノ理想ニ從ツテ獨立ヲ許容スル事ヲ嚴肅ニ約シタノハ斯カル願望ノ表明ニ應ジタモノデアアル、此ノ約束以來全住民ハ全カヲ擧ゲテ國家的義務ヲ引受ケルコトニ盡力シ彼等ノ獨立ノ基礎ガ完全且迅速ニ築キ上ゲラレル様ニ此ノ戦争ヲ成功裡ニ終焉セシムル決意ハ益々鞏固トナツタ。

而シテ今ヤ大東亞共榮圈連鎖ノ一環ヲ構成セル一ノ獨立國トシテ「インドネシア」ハ大東亞共同防衛ノ戦線ニ參加シ其ノ部署ニ就クノデアアル。「軍政官「軍政部部长」ハ此ノ際次ノ如ク述べタ。

「大東亞共榮圈ノ一員トシテ「インドネシア」獨立ハ世界新秩序ノ形成ニ寄與セントスル人道主義的原理ニ基クモノデアアル。故ニ「インドネシア」人ノ崇高ナル理想及ビソノ強烈ナル熱狂ハ大日本帝國ノ根本理想即チ八紘一字ニ一致スルモノデアアル。

「新國家ハ幾許カノ必須要件ヲ備ヘナケレバナラナイ、ソレハ充分ナル力ヲ有スルコトト、ソノ行政機關ハ圓滑且簡素ニ組織サルベキデアアル。夫故第一ノ義務ハ目下「インドネシア」人ノ直面セル戦争ヲ成功裡ニ終焉セシムルコトデアアル。

94.

Doc 2750

此ノ目的ノ爲ニ「インドネシア」國民ハソノ戦力ヲ最大限ニ發展セシメネバナラズ又大日本ト共ニ此ノ大東亞戦争ニ於テ最後ノ勝利ヲ獲得スル爲絶ヘマナク戦ハネバナラヌ。

獨立問題ニ付テハ數日間沈黙ノ日ガ續イタ。日本ノ宣傳ハ依然トシテ「日本ト生死ヲ共ニセヨ」ト云フ日本ト「インドネシア」ノ間ノ運命ノ一般的繋リヲ大キク取扱ツタ。